

河馬の姿

人があつた。甲が乙に向ひ「貴様の面つきは河馬のやうだな」と云つたところが、その場ではニヤニヤ笑つて肯定し置き乍ら、三年たつた或る日のこと、乙は突然拳をあげて甲を打ちのめし、「俺を河馬と、そしつた返報だ」とのゝしつた。餘り理不盡だから裁いて呉れと甲は訴へ出たのである。

判官は乙を呼び出し、「貴公は甲をなぐつた」かと尋ねて見た。

「然り」

「何の理由でなぐつたか」

「三年前に僕を河馬と呼んだから」

「なぜ即座に返報をしないで、三年も持ち越したのか」

「當時僕は河馬とはどんな動物か知りませんでした。ところが最近機會を得て河馬の面を眺めて見たら、そこで始めて怒氣心頭に發した次第です。宜しく御賢察を願ひます。」

右は實は根も葉もない造り話ではあるが、鷺見勇助のヒッポポタームスと云はれて、米國の上下にもはやされた一つ話である。日米親善の重き使命を帯びて米國各地で長廣舌をふるつた鷺見は、開口一番河馬裁判を持ち出した。米國は多年日本を馬鹿にしてゐるが、日本國民が覺醒してそれと悟つた折にはなぐるぞと云ふ遇話である。當意即妙な皮肉に、聞き入るヤンキーが手を打つて喝采した。そして鷺見のヒッポポタームスは、彼の本名を知らぬ人々が行き遇ふ彼を指さして、「見よミスター・ヒッポポタームスが通る」と云ふやうになつたほど有名になつた。

或る日鷺見はシカゴ大學に招かれて一場の講演をすることになつたが、悠然と演壇に歩を進めた刹那、座長であつた教授がソツと彼を呼びとめた。そしてどうぞ「ヒッポポター



不 定 芽

ムスの話を忘れぬ」やうにと注意した。

### 羅 馬 字 論

既に物故された地震學の大森房吉博士、地理學の山崎直方博士、その他本邦學界の名士を乗せて、郵船吉野丸がサザンクロスの輝く國へと波を蹴つて進んでゐた時のことであつた。羅馬字黨の旗頭として押しも押されもせぬI博士と他の人々との間に、時ならぬ羅馬字論の花が咲き出した。

Y 漢字制限の必要上羅馬字を用ゆることには僕は賛成するが、大森さんの名をH, Oh-mori と書くことだけはやめて貰ひたいナ。

I そう書いたつて何も不都合はないじゃないか

Y 大ありサ。たとへば大森さんが外國の銀行で爲替を受取る時にだネ、振出人の君が君の主義で受取人の名を H. Ohmori と記るして置いたとするか、大森さんは自らの名を F. Omori と署名してゐる人であるにも拘はらず、偽つて H. Ohmori と書かねば金が受取れないじゃないか。僕は斯る不徳な行爲を強ひる羅馬字は好まない。



不 定 芽

それは同じだらうじやないか、主客顛倒した場合を考へて見給へ。僕は自らH.と署名することよきめてあるのに、君達は僕に送金する際は自己一流の筆法でやつて来るだらう。そしてH.と書いてよすだらう、そうすれば僕も亦偽つてH.と自署しなければ金が受取れないから君の議論は成り立たない。

問題の人大森博士はソファにねそべつて夢の國に遊んでゐるが、兩雄の論戦漸くたけなはならんとするのを知つてやをら身を起し、

「その問題はいくら争つてもはてしが無いから預りにしましやう。平素温厚な人でも羅馬字論となると牙をむき出すから妙ですナー」と美事消火栓を引き抜いた。

折から襲ひ來つた南海のスコールに、一同はアタフタと船室に逃げ込んだ。そして火がつきそうになつた羅馬字論も、颯と吹き來るはやてにあふられてどこかへ吹きとばされた。

### 屍を馬革につゝむ

大正十二年八月、濠洲で開催された第二回汎太平洋科學會議に列席する光榮を擔ふた筆者は、我國學界の耆宿櫻井錠二老博士を團長と仰ぎ、本邦地震學の開祖大森房吉博士其他に伍して、南十字星の輝く國へと出發した。

航海中の大森博士は、終日黙々として讀書にふけり、人と言葉を交ふるのを大層厭つて居らるゝやうであつたが、謹嚴そのものゝ如き博士の平素を知悉してゐた我等は、別に氣にもとめずに日を迎へ日を送つてゐた。

クキンスランドの首府ブリスベーン市に到着したのは八月四日であつたが、氣温六十七度内外、日本より着用の夏帽は見るからに不釣合な寒さとなつたので、大森博士共々である雜貨店に飛び込み、冬帽を買ひ求めて歸船した。ところが博士が求めた帽子は餘程大きかつたと見えて、船が港外にすべり出ると間もなく、一陣の烈風にあほられ、ペリカンの群れ飛ぶ洋上遙に吹きとばされてしまつた。その後博士は無帽で甲板を來往されるので、或

屍を馬革につゝむ



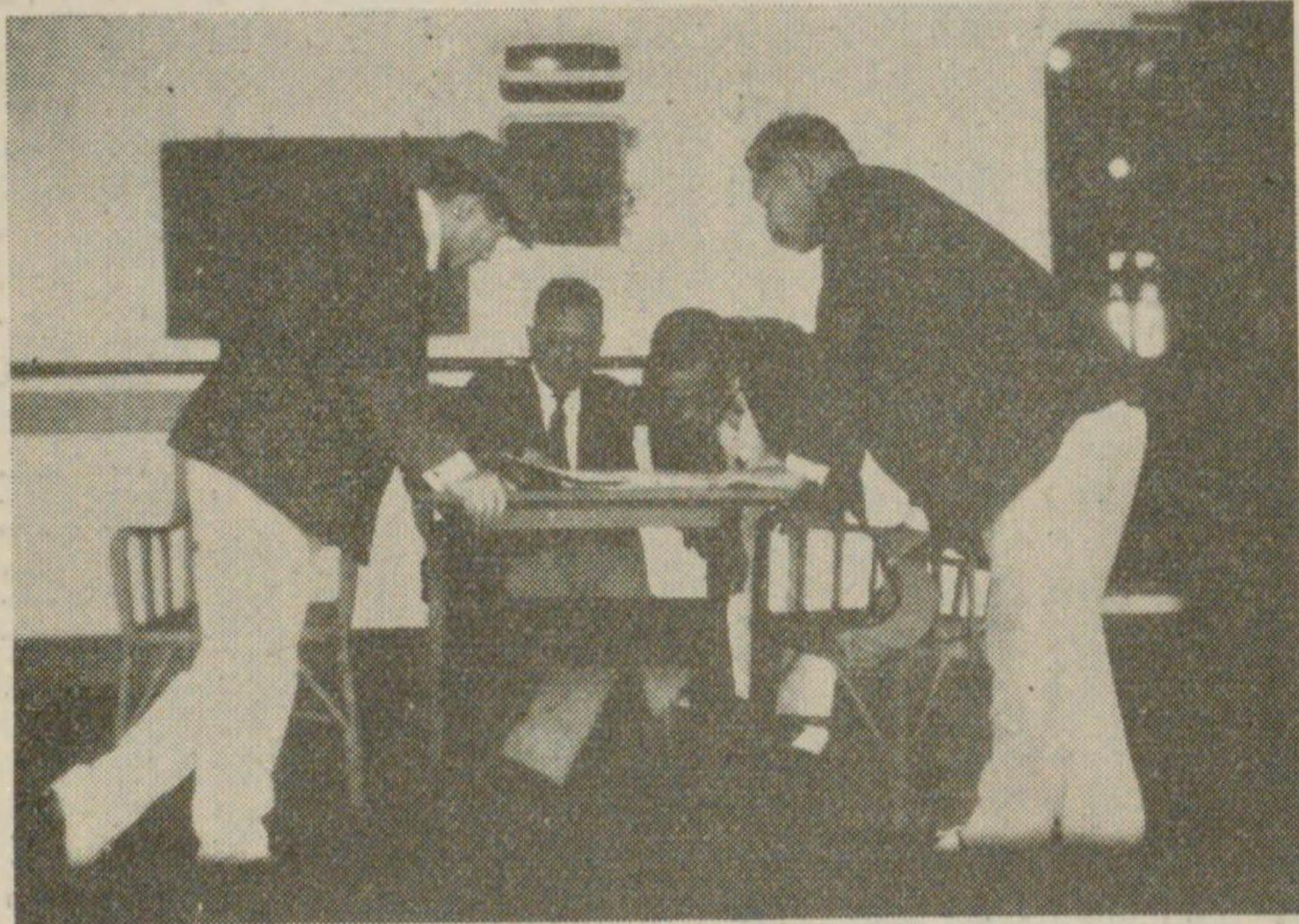
不 定 芽

日帽子はと尋ねて見たら、「實は皆さんに笑はれるといけなと思つてだまつてゐました」と前置きして前記の顛末を告白された。

シドニー上陸のその夜、博士は「少しく気分が悪い」と訴へられた後、「昨夏滿鮮旅行を試みた際から頭の工合が悪いが、病勢が段々悪化するやうに思ふ。自分の血統中には腦卒中があるから、近く僕はそれでやられるのではないかと思ふ」とまことに心細い話をやり出した。

航海中斷片的ではあつたが、地震に關する興味ある所説を拜聽する機會が多かつた。駿河灣燒津附近に強震のあつた際、多數の太刀魚が震死した話や、雉が地震を豫知する話などがその例であるが、中で最も我等の興味を引いたのは、本邦の地震地帯を詳説した後、次に來るべき大地震は東京附近にありと斷定された一事であつた。その際右の御意見を既に發表されたのですかと尋ねて見たら、「私がそう云ふことを發表しては、人心を動搖させる恐れがあるから、愈々確實だと云ふ信念を得るまでは公表致しません」と答へられた。

シドニー滞在中關東大震災の飛電に接した筆者は、早速博士に見えてその豫言の的中



屍を馬革につむむ

地震を語る大森博士(吉野丸にて)  
右より大森房吉博士・池野一成博士・山崎直方博士  
小倉伸吉博士

したことを賞讃したところが、「大震の起つた地點は豫察した通りでありましたが、時期に誤算がありました。私は尠くとも六十年後であらうと考へてゐました」と大森博士は答へられた。

最初の會議開催地なるメルボルンへ向ふ際、博士と私とは寢臺車の同じコンパートメントに席を占めたが、「病勢が漸次充進して食物が攝れぬ。何か薬がありませんか」と尋ねられた。

早速持ち合せの健胃劑を進呈し



不 定 芽

たところが、「お影で大分工合がよくなつた」と云はれ、そのまゝ目的地へ進發した。然し博士の病勢は次第に重るばかりであつた。そしてメルボルン滞在中食物が殆んど喉を通らぬやうになつたので、會議には無理に出席されるが、凡ての招待を斷つてホテルに病臥されるやうな事になつた。

メルボルンに於ける會議中博士の病狀は益々險惡になつて來たが、何しろ斯界の大立物ではあり、専門學科の座長と云ふ重い役目を引き受けて居られたので、責任觀念の強い博士は連日病を押して奮闘された。見るに見かねた我等は、博士に即時歸朝を勸告しようとしてよりより相談した程であつたが、次の會場なるシドニーへ引き返した際には、殆どスーパ以外のものは喉を通らぬ様な状態に陥つた。それにも拘はらず開會の初日に大講堂で地震に關する講演を試みたのを手初めに、其後の部會に又通俗講演に、あの温容を現しては列國學者の尊崇の的となつて居た。

故國に大震災の起つた九月一日より二日にかけて、病體の大森博士を除く一行の凡ては近郊へ旅行に出かけて居た。獨りシドニーへ残された博士は、シドニー灣頭に立てるリヴ

アーヴェー天文臺々長ピゴット氏の午餐に招かれ、一日の正午には其天文臺の客となつて居たが、午食を終るや否やピゴット氏は博士を己が觀測所に伴ひ、早速地震計を安置してある室へ案内した。博士が地震計の前に立つた其瞬間、示針は俄に異常な曲線を書き出し、どこかに大地震が起つて居る事を告げ知らせた。博士は「今太平洋のどこかで大地震が起つて居ます」と低聲で注意し乍ら仔細に之を觀測し、天文臺長と共に震源地を取調べた處が、それが眞直に東京方面を指して居たので愕然とされた。最初震動を感じたのが午後一時九分八秒、最大の振動を感じたのが、一時三十八分であるが、其際之を本邦の標準時に換算し、博士は正午前後に我國に大震があつた事を早くも推測されたのである。事はまことに偶然であるが、我國未曾有の大震を、當時世界的存在であり、我國唯一の地震學者であつた大森博士が、海外遙かの地點で觀測してゐたと云ふことは、學界の挿話としてまことに珍らしいことであると思ふ。

その後筆者が該天文臺を訪れた際、臺長は筆者を地震計室に伴ひ、大きな地震計の前に立たせて、そこが大森博士が觀測された位置であると告げ、「大森博士が居なくてもこ

屍を馬革につむむ



不 定 芽

の地震計は日本の大震を記録したに違ひないが、當時描き出されたグラフは、大森博士が見つめてゐたもので、實に世界的珍寶である。長く保存して記念物にする」と鬼の首でも取つたやうな顔をして語り出た。

重き責務を果たした大森博士は、一刻も早く故國に歸着して更に重大な任務を遂行すべく決意し、一行と別れて孤影悄然布哇廻りの船を選んでシドニー埠頭を後にされたが、出發の前夜再起覺束なきを思ふて遺言狀を投函したと語られた。博士を乗せた巨船ナイアガラ號が、一抹の煙と共に洋上に消え行くのを見送つた我等は、悲壯な決心を抱いて故國に急ぐ學界の戰士を神守り給へと心ひそかに祈つたが、本邦地震學の父たる大森博士は遂に再び起たなかつた。ところで重態のまゝ故國にたどりついた偉大な戰士を迎へた國民の凡ては、頗る冷やかにそのむくろを見まもつたのみならず、甚しきに至つては、大森博士は大震を豫知して海外に逃げ出し、以て負ふべき責任を廻避したとさへ云ひふれたが、實以て心外千萬なことである。シドニーに於ける公式歡迎會の席上で、濠洲學術研究會議の議長デヴィッド博士が、「日本に於ける一火山の爆發に際し、大森博士の豫報により如何に多く

の人命が救はれたかを記憶せよ。吾人はこの畏敬すべき平和の戰士と相見えて席を共にする光榮を得たるを喜ぶ」と述べたその一事から推して見ても、地震博士大森房吉の名が、如何に燦たる光を放つてゐたかを窺ひ知ることができやうと思ふ。健忘性の我國民は今や大森博士の名などは全く忘れ去つてゐる。この際隠れたる事實を世に示すことは、行を共にした者の責任であり故人に對する禮であると思ふ。

屍を馬革につゝむ



不定芽

### 御旗のひかり

世界戦争もたけなはな頃のことであつた。獨艦エムデンが遠く太平洋上に出没して狂暴の限りをつくす、米の巨船ルシタニアは北海の藻屑と消えてアンクルサムを戦の渦中にまき込んでしまふ。物情騒然、聯合軍の旗色は稍々怪しくなつて來たので、ユニオンジャックを翻へす濠洲聯邦の民草は、砲煙みなぎる歐洲の天地を思ふて、日夜焦燥。枕を高ふして眠り兼ねる日が續き出した。故國に残る親も出た子も出た。傷つく者斃るゝ者。銃をとるジョンブルの人だねは將に盡きやうとする。「送れつは者を!! 守れ祖國を!!」との聲が南十字星の輝く國を震撼させた。蹶起した壯丁を仕立て、またたく間に護國の一軍團が編成された。そしてヴェルダンへ、ヴェルダンへの聲が、怒濤の如くまき起つた。今日は戎衣に身をかためた親しき者が海を渡つて行く日である。舳艦相含んだ運送船の一隊が、海に陸に涙をこめて合唱される「神よ我が君を守りませ」のうた聲に送られて錨をまき上げた。銃を高くあげてゐるのは最愛の夫ではないか。劍を按じてこなたを見つめ

てゐるのは、幾年月守り育てたいとし子ではないか。風光明眉を以てほこるシドニー港をめぐる丘と云ふ丘に、市民は黒山のやうにたかつて二度とは歸り來ぬであらうめでにし者を見送つてゐる。

見よユニオンジャックをふりかざす將士の意氣は天をついてゐるではないか。愛する者に托して愛國の熱誠を送る市民の眼は、ものすごい佛蘭西の戰場をにらんでゐるではないか。されど征途に上る者と熱誠をこめて送る者と、兩者の胸に宿る一抹の不安、あの劣勢な軍艦にエスコートされて、今送る救ひの兵が、首尾よく佛蘭西の地を踏むであらうかとの懸念が、暗雲となつて港一杯にひろがつてゐた。

勇ましくも隊形を整へた運送船隊が、波を蹴つて港口を進み出た。鵬程萬里征旅の夢や如何にと涙の露を浮べて遠く洋上を見つむる銃後の人の眼に、怪しや立ちのぼる幾すぢの煤煙が映じ出した。一つ二つ三つ四つ、マストが見える、煙突が見える、恐ろしい砲が見える。突如として現はれた大艦隊が、二列縦陣を造り、よろめき出た運送船隊を目がけてまつしぐらに突き進んで來る。獨艦現はる!! 萬事休す!! 港口で、眼の前で、父が子が

御旗のひかり



不 定 芽

夫が、海のもくづと消えて行く。見よ船上ではかなはぬながらもと將士が銃を握りしめてゐるではないか、今し征途を祝した幾萬の市民は、顔をそむけて慟哭した。暗雲遂に雨を呼んだその様は、實に慘ましいものであつた。

來るべき時は遂に來た。運送船隊は忽ち怪しの艦隊に狭まれてしまつたが、不思議や各艦一齊に轉廻して、運送船各自の舷側にピタッとよりそつた。何ごとぞ銃をかまへた將士が、狂喜亂舞するのが眼に見える。籠手をかざして眺むれば、エスコートするかの如く見える艦の艦尾に翩翩とひるがへる旭日の御旗。あゝ日本!! 日本!! 日本の海軍!! ブラボー!! 山に丘に埠頭に澎湃として歡聲が湧き起つた。堂々海面を壓して水平線下に消えゆく艦船を眺め入つたその刹那、むらがる市民の胸に、深く深く滲み込んだものは何であつたらう。皇威八紘に及ぶ。我等は實に良き國に生を享けたものである。

或る日曜の午後、筆者はシドニーハーバーを東に渡つて郊外に散策を試みた、埠頭を去つて數歩を運ぶその向ふから、人相餘り宜しからぬ巨大な男が寄りそつて來る。事なか

れと身をかはそうとする筆者の手を、彼は固く握つて挨拶をした。猛鷲ににらまれた雀のやうにげんな顔をして立ち止つた筆者の様子がおかしかつたのか、ハッハハハ……と大きく笑ひ乍ら、彼は懷から一葉の寫眞を引き出した。そしてそれを筆者の面前につきつけて、これは誰に見えるかと問ひ正した。軍服を身にまとふた立派な英國の士官である。「僕に見えないかネ」と云はれて初めて氣がついて見ると、ヌックと立つた土方の様な男は、正に寫眞の主であつた。

「僕は大戰當時工兵大尉として出征した男だ。見給へ胸間には勳章が輝いてゐるだらう。然し退いて考へて見ると、名譽の勳章は、僕等濠洲兵を安全に戦地に送り届けた日本海軍が與へて呉れたのと同様だ。日本のネーヴィーに、日本の國民に、感謝したい念慮で胸は一杯だが、爾來日本の人にはめぐり遇はなかつた。受けよ感謝の心を」

と云つて彼は又筆者の手を固く握りしめた。御旗の光が此處にも照り輝いてゐる。故國を後にして初めて知る己が國の力強さを。そして知らぬ時知らぬ地域で國威を發揚してゐる皇軍のめでたさを。

御旗のひかり



不 定 芽

かれを思ひこれを思ひ、シドニーの埠頭に立つて、うすがすむ港口を眺めて見た。風に翻る旭日の御旗が眼に浮ぶ。櫻花に映ゆる國はまことに良い國である。大和島根に生を享けた國民は、幸これに若くものは無い。

### 或る日曜日の朝

太平洋學術會議に參列したO博士が、嘗つては濠洲聯邦の首都であつたメルボルンに到着したのは土曜日の午後であつた。日曜日の朝旅舎に目ざめてその日の行動を思案し、地圖を開いて遊覽の場處を定めた後、クラークを呼んで自動車をと命じたところが、今日は日曜日ですから乗物は動きませんと斷はられた。

そう云はれて氣がつくと、耳朶をうつのは鳴り響く教會の鐘ばかり。街路には電事がきしる音もせず、昨日の喧噪は夜と共に收まり、聖安息日を迎へた全市は、靜寂そのものゝ如き様を呈してゐた。「日曜日のメルボルンは、教會へ行くよりほかに仕方がないところだぜ」と、朝食を共にした旅客の一人がつぶやいたが、眞にその通りであつた。

日曜日はメルボルン市民にとつて、まことの安息日である。娛樂のための自動車は、街路に決して姿を現はさぬ。教會の來往に必要な時間以外電車も運轉を休止する、又日曜には到着する列車は仕方ないとして、メルボルン驛からは決して發車しない。旅客にとつて

或る日曜日の朝



不  
定  
芽



メボルン市リフダン街一停車場附近の光景

は迷惑至極であるが、日曜は行樂の日であると考へてゐる米人に對比して見ると、このあたりに格段な相違がある。頑迷であると笑ふ人もあるかも知れぬ。然しかく宗教的慣習を固執するメボルン市民に、ジョンブルらしい床しさが現はれてゐる。米國でデヴィスカップを争ふ濠洲庭球選手の戦ひの日が、偶々日曜日にあたつたと聞いたメボルン市民が、憤慨の極遙に電報を飛ばして争覇戦を中止せよと申し送つたと云ふ挿話がある。人は笑ふがかく宗教

に固着するところに、濠洲人の強味がある。

考へめぐらしてゐる間に禮拜の時刻が來たか、そこ此處の高い塔からカランコロンとゆかしい鐘の音が響き出した。足の向くまゝに靜な街路を歩んでゆくと、とある町の角に大きな教會が向ひあつて立つてゐるのが目についた。一つはバプティスト教會、他の一つは獨立組合教會とある。後者の名に親しみのあるO博士は、ツカ／＼とドアを排して讚美歌の聞ゆる方へと歩を進めて見た。長老とか幹事とか云ふ役員の一人であらう、それと見た中年の紳士が飛び出して來てよく來て呉れたと云ふ。そして丁寧に案内して、中央の座席へ遠來の客を導いた。同じ天父を拜する聖安息日の氣分は、異郷にあつても故國にあつても全く同一である。教友と共に祈り共に讚美し、俗腸を洗ふて將に席を立たうとする時、先刻の紳士があたふたと飛んで來た。そして牧師に引きあはす、會衆の誰彼に紹介する。この教會初まつて以來迎へ入れた最初の日本人であるとかで、O博士は歡迎の人波にもまれることになつた。日本人はすべて異教徒で、安息日などを解せぬ人種だらひに白人どもは考へてゐたのであらう。ところがメルボルンなどへは滅多に姿を現はさない日本

或る日曜日の朝



不 定 芽

人、然も學術會議に參列した科學者の一人が突如として姿を現はし、奇異の眼を見る會衆に向つて兄弟姉妹よと呼びかけんばかりにしたのであるから、騒ぎは中々大きかつた。握手又握手、O博士も殆んど弱りはてゝゐるところへ、見なりいやしからぬ一人の紳士がやつて來た。そして「今日の午後は約束がありませんか」と問ふ。「否」と答へると、「それではどうぞ宅へ御光來下さい」と云つて、稍々當惑してゐた博士を會堂の外へ導いた。パーキングしてあつた立派な自動車の扉をあけた。そしてこれが長男だと紹介した若者にドライブさせて、坦々たる道をひた走りに走つた。メルボルン灣頭風光明媚な一角に聳へ立つ宏壯な邸宅がその紳士の住居であつた。主人について玄關に闖入した見知らぬ東洋人が、教會で拾はれた珍客であると聞いて、夫人も娘も手をひろげてO博士を歓迎した。そして質素ではあつたが心をこめた晝餐を共にして、紳士即ちN氏とその家族と、なごやかな日曜日の午後を、心ゆくばかり語りあかした。異郷に於て、信仰を共にした友の、國境と人種別とを超越した歡待振りに、O博士は良きサマリア人の話を思ひ起して云ひ知れぬ感激にひたつてゐた。そして別るゝに臨み、N氏の手を固く握りしめ

日ごと我がなす 愛のわざをも  
人に知らさず かくしたまひね  
と我等は常に歌つてゐるが、見知らぬとつ國人に向つてなされた貴君一家の愛のわざは、このまゝ消え去ることは決してない。いつかは花が咲き實を結ぶ時が來るであらう。日濠親善の芽生へは、かゝるところから芽ぐむことを固く信ずると云つて厚い感謝の意を表した。

明日はメルボルン市に別れを告げんとする日であつた。目抜き街路を人波にもまれながら歩るいてゐるO博士の姿を見とめて、ドクトル!! と呼びとめた覆面の婦人があつた。手をさしのべて握手をしながら、自分を覚えてゐますかと話しかけた。アットホームにお茶の會に、澤山の淑女と交歡した際のことであるから、誰か言葉をかはしたことのあつた人だらうぐらひに考へて、O博士は軽く「存じてゐます」と返辭をした。ヴェールを通して、輝やく二つの眼が笑を含んでジツト相手の顔を見つめてゐる。



不 定 芽

「いつ御歸國ですか」

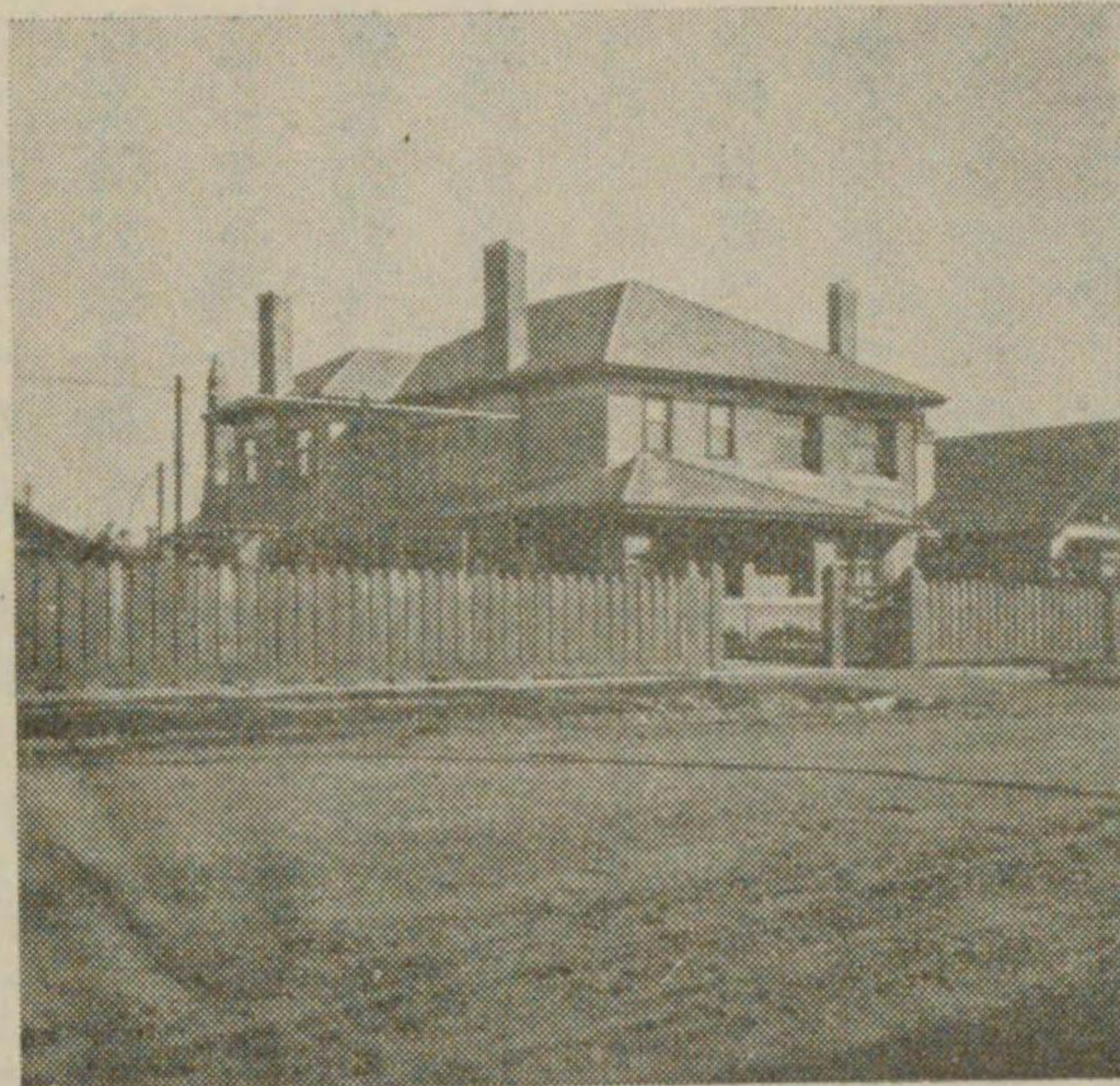
「先日は御尋ねしそこねましたが、御宿はどちらですか」

その聲に覚えがある。はてナと首をかしげて  
ウエールの中をのぞき込んで見ると、笑つて  
ゐるのは忘れもせぬN夫人であつた。

「先日御話を伺つた御宅のお嬢さんに、ほ  
んの心ばかりですが差し上げたいものがあ  
るのです。後刻ホテルへ御届け致しますか  
ら、御迷惑でしやうが御持ち帰り下さい。

さらばさらば。ボン、ポヤージ!!」

とやさしい言葉を残して夫人は群集の中へま  
ぎれ込んだ。



邸の氏N外郊ンルボルメ

會議に參列した各國の科學者を運ぶ特別列車が將にメルボルンの驛頭を離れんとする時  
長いプラットフォームを歩きつ戻りつして誰かを探し求むる人影があつた。車窓から顔を  
出したO博士の姿を認めた瞬間、黒い衣服を身にまとふたその人が、飛鳥の如く飛んで來  
て手を差しのべた。見れば獨立組合教會の牧師であつた。そして一冊の書籍を差し出し、自  
分の教會へ來て呉れた記念に進呈するから船中で讀んで呉れと云ふ。「Bunch of Flowers」  
と表紙に記るしたさゝやかな文集である。O博士は心のこもつた、その花束を抱き、慈父  
の如きまなざしで消えゆく列車を見まもるその聖者をプラットフォームに残し、思ひ出深  
かりしメルボルンに別れを告げた。

行李に秘めた夫人の贈物を、幼なき娘の手によつて開かせたところが、洋服の下着が出  
た。ハンカチーフが出た。リボンが出た。そして

「あなたのお父さんが宅へ來て下さいました。あなたは洋装をしていらつしやると聞き  
ましたから、私や娘の手でつくつた品々を差し上げます。私共濠洲の婦人は、他人に親  
切を盡したいと思つてゐます」

或る日曜日の朝



不 定 芽

N夫人より愛するミスOへと認めた玉づさが添へてあつた。

ミスOは心をこめたN夫人の送り物を、今尙筐底深く秘めて良きサマリア人の姿を胸に描いてゐる。而してO博士はいつまでも色あせぬ花束を書架から引き出しては、ありし日の思ひ出でにふけつてゐる。

### 六十歳の中學生

シドニー大學地質學教授のコットン博士その他を案内して、洛西高尾の紅葉を探りに出かけた折のこと、コットン教授は夕日に映ゆる紅の谷を目がけて盛んに名物のかはらけを投げ飛ばし、「數十萬年後に人類學者が今投げたかはらけを發掘したら、どんな推定を下すだらう、まさか濠洲から來た人間が、力にまかせて投げ飛ばしたものは氣がつくまい」と笑談を云ひながら投げる投げる。

その無邪氣な有様を見て興みし易しと思つたのか、遠足の一隊と見ゆる中學生の一群が、ドヤ／＼と教授の廻りに押し寄せて來た。それを眺めた教授は持ち前の茶目振りを發

揮して忽ち攻勢に出た。

教授 “I am a teacher of a school. Do you know my country?”

學生 “America”

教授 “No!”

教授 “Will you tell me the name of your school?”

學生一「さつぱりわからんナ、何云ふて居るんやろ」

學生二「學校の名を聞いたんやないか」

學生三 “My school Hanazono Middle School”

教授 “Well, what is your name?”

學生三「わからんナ、三年生になつたらわかるやろか」

學生一「先生を連れて來んことにはさつぱりあかん」

ガヤ／＼評議を始めた中の賢さうなのをつかまへた教授は、微笑を泛べながら更に追窮した。

六十歳の中學生



不 定 芽

教授 “How old are you?”

學生三 “Sixty”

教授 “Really? Are you sixty, instead of sixteen?”

學生三 “Yes”

教授 “Well, well! You are much older than myself”

顧みて呵々大笑するコットン教授をとりまいた中學生も亦笑ひどよめいたが、グッドバイと自動車の中で手を振る教授を見送つた彼等は、今度は聲を揃へてグッドバイとわめき立てた。

華園中學二年生でも、この英語だけはよくわかつたらしいが、三年になつたら果してどのくらひわかることだらう。

### 三 崎 の 熊 さ ん

伊太利ナポリの臨海實驗所では、ロビアンコと云ふ老人が諸國の學者達を煙にまいてゐると云ふが、油壺の東大臨海實驗所には、開所以來四十年、来る學生どもに「海の生き字引」とあがめられてゐる今年六十八歳の三崎の熊さんこと青木熊吉が、今猶矍鑠として忠勤をぬきんでゐる。

いつのことであつたか、魚くさい三崎の町に熊さんの宅を訪ねて、門前の軒燈に動物商と書いてあるのを見た。動物商とは海産動物標本商と云ふ意味である。日本の海産動物を手にした外国の學者達から、註文の手紙が何通となく来るほど、動物商青木熊吉の名は天下に鳴り響いてゐる。その熊さんが時折横文字の手紙を持つて来る。そして、「返事をやるべえと思ふから、用向を見てくらつせえ」と頼みに来るが、ラテン語の動物學名をストラと吐き出す奇態な能力を持ちながら、片假名以外はまるで知らない明き盲である。はだ身離さぬ帳面の表紙には「オボ丁」と書いてある。これは覚え帳の意味であるとのこと

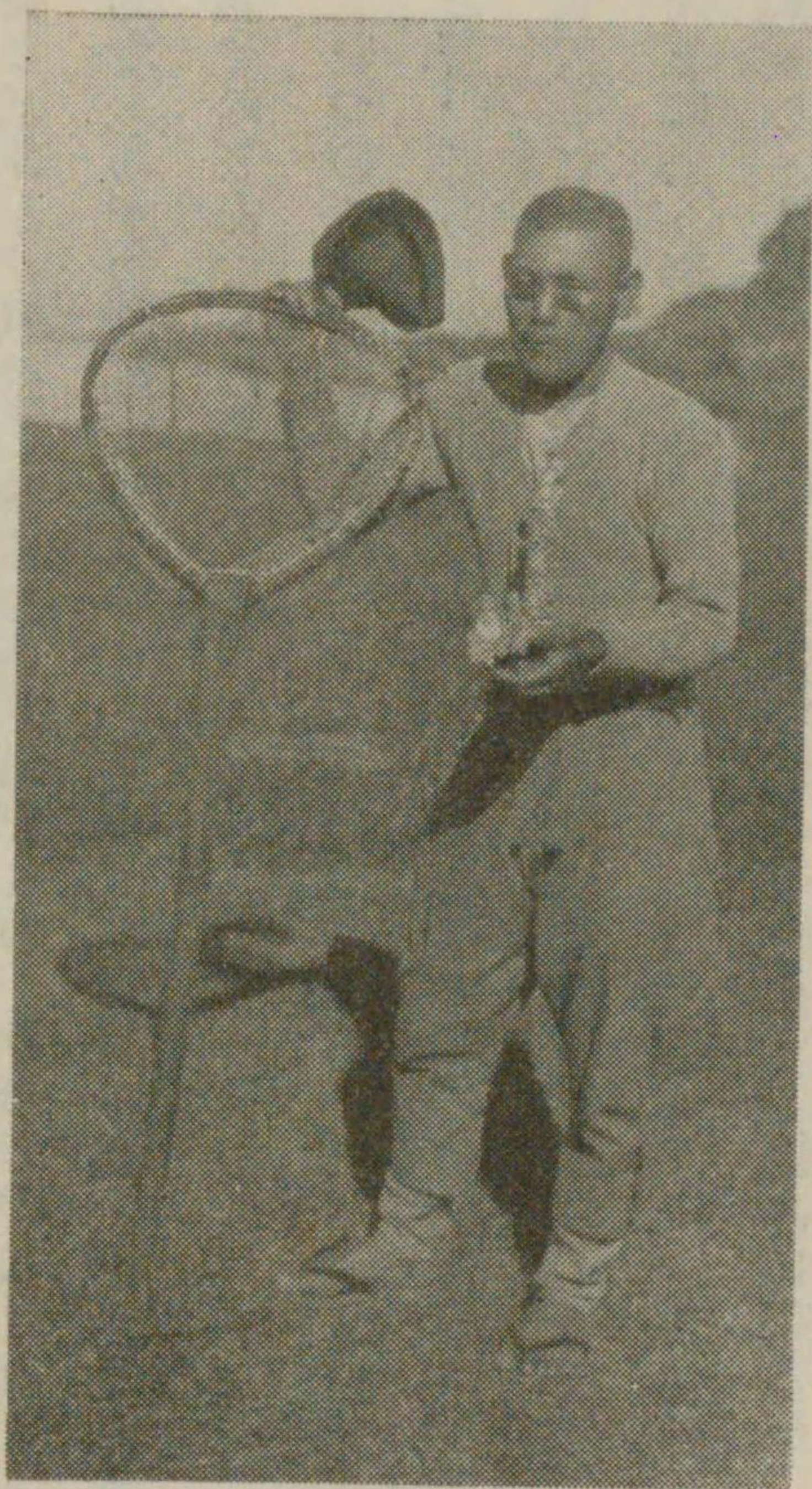
三 崎 の 熊 さ ん



である。

不 定 芽

今から約四十年前、三崎町のかたほとりに臨海実験所の前身が建てられた。それを興味



三崎の熊さん

深い眼をかゞやかし乍ら、のぞきに來る利口さうな青年漁夫があつた。卒直な性質と、無學ながらも研究心に燃えてゐる態度とが、我國動物學界の大元老達に認められた。そして

大學專任の採集夫を拜命したが、何しろ世界の大學者箕作、飯島兩博士に指導されたのであるから、物識りになるのが當然である。且つ又實物につき最初から學名で仕込まれたので、神戸あたりの車夫の英語と同様、書いたり讀んだりすることは出來ないが、頭の中に

はすべてが識り込まれてある。かうして名物熊さんが出來上つた。

現今世に行はれて居る海産動物の和名で、熊さんの命名したものがどれ程澤山あるか、こゝには一寸擧げきれぬ。海底からあんぱんのやうな形の子海膽を拾ひあげて、「章魚が枕にして寝るものだんべえよ」と云つたのが動機で、其動物には「たこのまくら」と云ふ名が興へられた。棘皮動物中の「すかしかしばん」「ゆめなまこ」の類、凡て熊さんの第一印象が其名となつて現はれて居るのであるが、相模灘の動物で熊さんの頭に疊み込まれて居ないものは殆ど無いといつてよい。

或る夏のことであつた。水族館に入れようと思つて、ブダヒと云ふ魚を漁船から運びあげて居る最中、彌次で有名な一人の學生が波止場へやつて來た。

「オイ熊さん、ブダヒとはどう云ふわけだらう」

「さうよなア。ブとは一體悪いと云ふことだよ。不行儀、不作法、ぶざまと云ふやうにまあ良いことではねえな。お前なんか人間の中でも「ぶをとこ」だんべえ。これは鯛の

三崎の熊さん



不  
定  
芽



朝の壺油

不恰好な奴だからブダヒだアね」  
眼をしばたたきながら、熊さんの放つた巨砲  
には、さすがの學生も美事打ちとめられた。

新米の學生が、満潮時にボートをしつかとし  
ぱりつけて置くのを見た熊さん、

「夜なかにボートが首をつるぞ」

と、どなつて居るのを度々聞くが、潮のひいた  
朝早く埠頭に来て見ると、なるほど水に従うて  
移動することの出来ないボートが、柱を抱いて  
直立して居るのを見る。

「綱を延ばして舟をつなぐことを知らねえ奴  
は素人だ」

三  
崎  
の  
熊  
さ  
ん



三崎より壺油へ

と、熊さんは述懐するが、新しい學生は  
一二回必ずボートの首つりをやつて熊さん  
の教を受ける。

日本に来て見ると、どこへ行つても鶴と  
龜とが置いてあるので、或るアメリカの學  
者がこの二つの動物は夫婦だらうと鑑定を  
つけた。そこで鶴と龜とを土産に買って歸  
つたが、アメリカへ行つてみると、どうも  
夫婦仲が宜しくない。そこで鶴が氣をくさ  
らし、

「龜さん龜さん、わしの脚や頸の長いの  
がいやか」



不 定 芽

と尋ねたら、

「いゝや、何もいやではござんせん。然し昔から譬にいふじやアねえか。鶴は千年龜は萬年と。わたしやアメリカで九千年の後家を通すのがいやでござんす」

と、龜が云つたとよ——と熊さんは自作の落し噺にまじめな聽者を煙にまく。酒は飲まず煙草は吸はず、飄々乎としたところにこの男の味がある。

### 魚 界 挿 話

夏に關聯して思ひ起すのは水である海である。苦熱にあへぐ人間を尻目にかけて、涼しそうな水晶宮の中を右往左往する魚の群、色とりどり姿とりどりのその魚の世界に、夏を賑はす色々の挿話がある。屑籠に拾ひ集めた魚の話を、次から次へと記して見よう。

#### うつかり眠れぬ沖の鷗

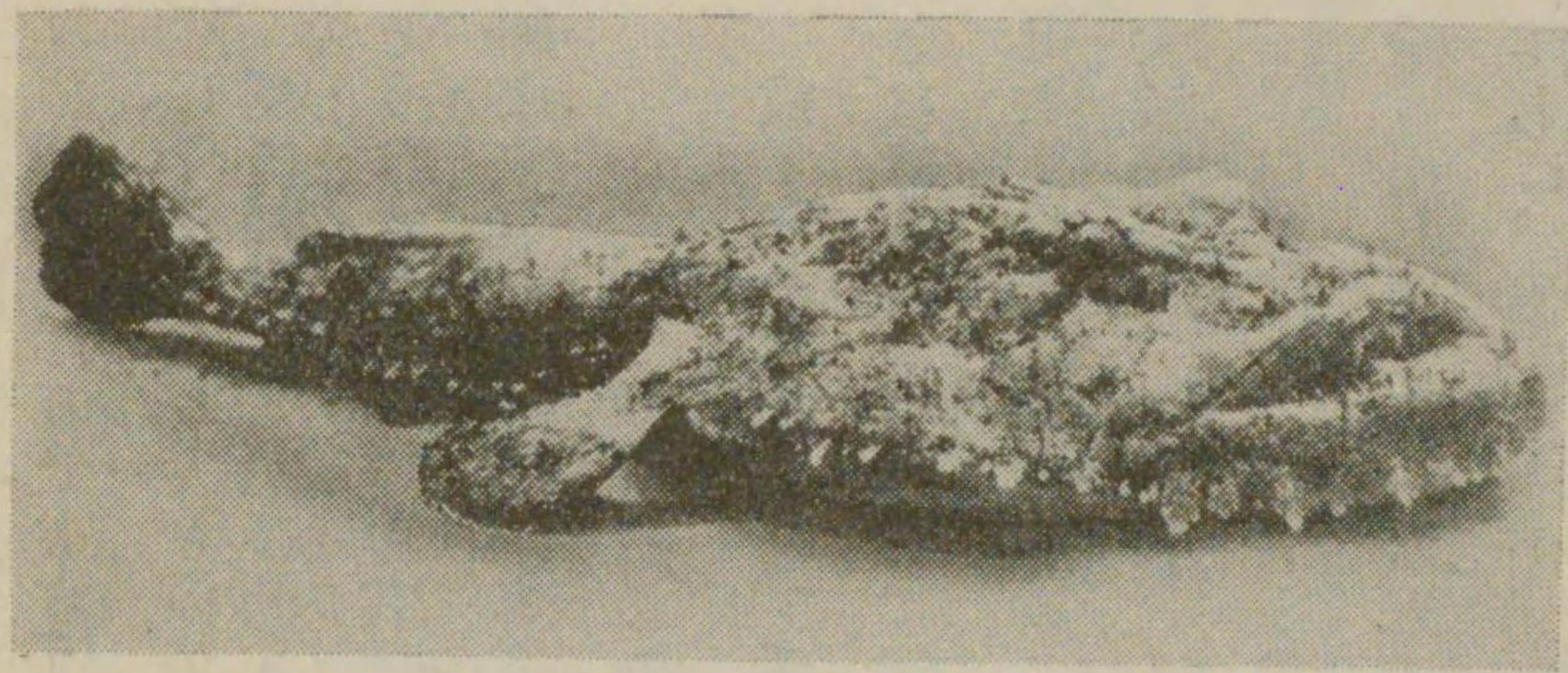
或る年の冬のこと、米國ニュージャージー州の海近く棲むボレヴァーイと云ふ男が、大きな麻の袋をかついで紐育自然博物館に現はれた。大怪魚を生捕つたとの話に興味を湧かせたその道の専門家が、ソツと袋を開いて見たら、トタリと音がして、體長一米あまりの大鮫鰐がすべり出た。

ボレヴァーイは、その日二三の友人をかたらひ、朝まだき海に小舟を泛べて鴨打ちにと漕ぎ出した。岸から五六哩ほど遠ざかつて、何氣なく行く手を見渡すと、朝霧立ち込む洋上に、黒い怪物が、大波紋を描いて廻轉してゐるのが眼についた。

魚 界 挿 話



不定芽



水鳥を呑む大鯨

鯨が来たッ!! と一同は身構へたが、怪しものは同一地点を廻つてゐるばかりで、進みも退きもしない。はてナとソロリ／＼舟を漕ぎよせて見たところが、意外!! 意外!! 口から鷗のつばさが見出てる大鯨が、眼を白黒させて苦悶してゐる。

きはひ立つた一同は、力を併せて怪物を舟に引き上げた。そして半ば呑み込まれてビクビク動いてゐた鷗をソッと引き出して見たが、それは翼の下へ首を入れたまゝ、眠れる姿で呑まれてゐた。

鯨は平素深さ百尋内外の海底に於て、沙上に惰眠を貪つてゐるが、暴食性の彼は、餌を索むべく暗に乗じて海上に浮み上つて来る。

明けやらぬ心地よき朝の海に、鷗はウツラ／＼夢路を

たどつてゐたのであらう。ねらひすました大鯨は、巨口を開けてそれをガバと呑んだ。然し身にあまる大ものが喉につかへて、はりきつた浮き囊の空気を脱出させる道をふさいでしまつたので、あかくと東が白んでも深みへ沈むすが無くなつたのである。

鯨のことを英語で Goose-fish と云ふ。これは鷺鳥や鴨を一呑みにするから生じた名である云ふが、かやうな實例が現はれて見ると、それも満皿うそではないやうである。

聲泣かせ

體側に廣い茶褐色の帯條が斜に並列してゐる「たかのはだひ」は、見ては姿の美はしいものであるが、鯛と云ふ名を與へられながら、これほど不味な魚はない。尙又肉がまづい上にその鱗は皮膚にしつかり喰ひ込んで容易に剝がれない。調理せよと渡されたら聲が泣く。そこで伊豆方面ではこの魚を「むこなかせ」と云ふ。

損得無し

尾が黄色で體側に紺青の細條が縦走してゐる「きんちやくだひ」は、水族館などに泳がせてはこの上ない麗はしいものであるが、皮は固くて肉は頗る不味である。貰つても呉れ



不 定 芽

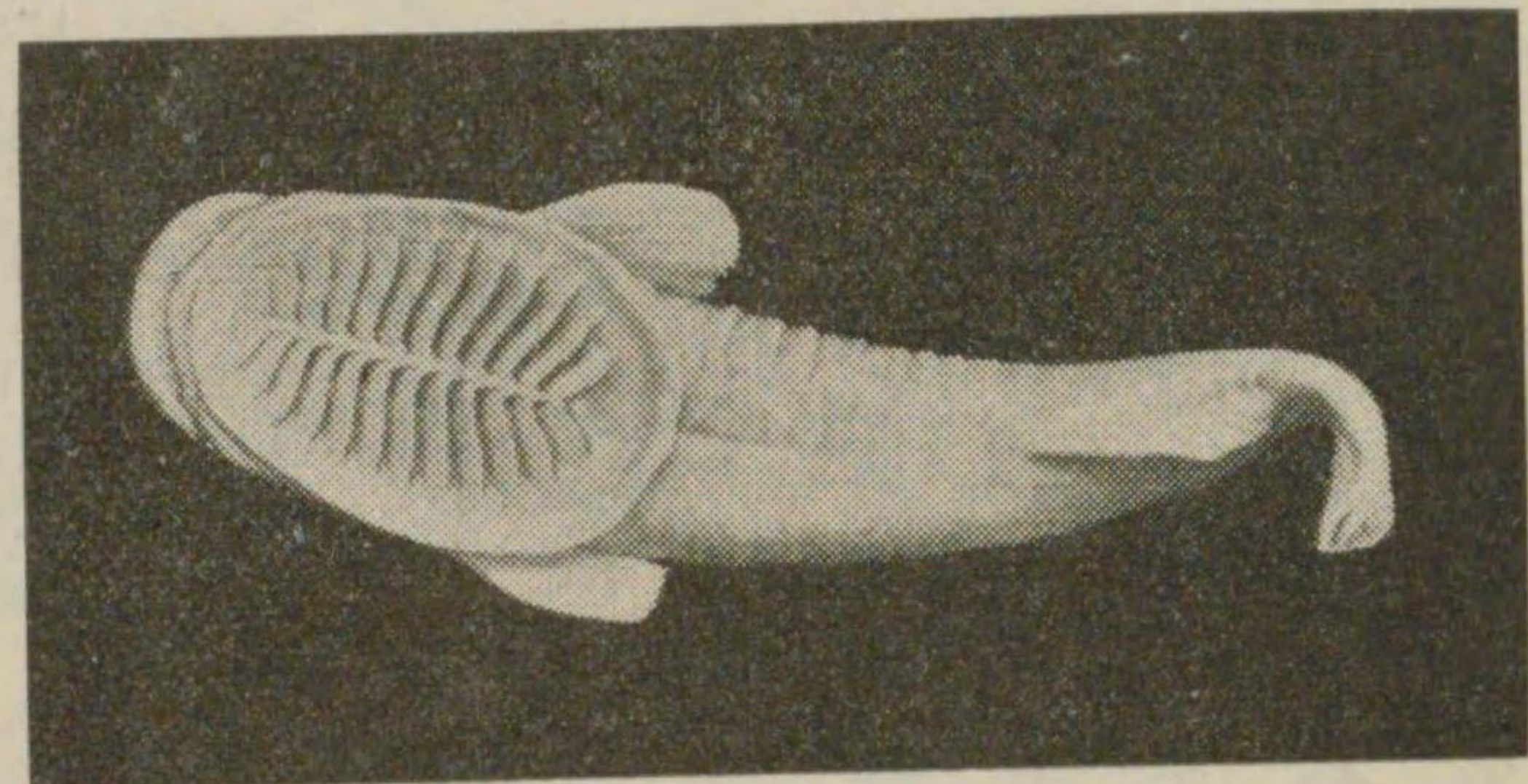
ても損得が無いと云ふわけか、三崎あたりの漁夫共は之を「そんとくなし」と呼ぶ。

小 判 野 郎

「こばんいただき」は頭上にある小判なりの吸盤で大魚の腹面に吸着し、北から南へ、東から西へと広い大洋を無賃で運んで貰つてゐるが、空腹を覚へるとソロリ／＼宿主の下顎の下へにじり出て、巨口を開いて棚から落つる牡丹餅を待つてゐる。即ち宿をかした鮪なり鱈なりが小魚の群を追ふて一呑みにすると、その落ちこぼれが下で口をアーンとあけてゐる「こばんいただき」の胃に流れ込むことゝなる。この魚は宿をかりてはゐるが、自らは獨立の生計を營むから世にいやしめられる寄生々活者ではない。

然し巧妙な無賃乗車を敢てして、徒手よく食にありつく「こばんいただき」ほど狡猾な魚類は他に類例が無い。漁夫仲間に彼奴は小判野郎だと云ふ常套語があるが、蓋し船で運ばれては港々で他人の馳走になることを心がける「こばんいただき」の如き人物を云ふのである。頗るうがつた言葉である。

獨 逸 の 鮎



「きどたいんばこ」な 鯉 鮎

いつであつたかガリクルチを帝劇に聞いた際求めた曲目解説に、シューベルトの Forelle と云ふ曲を鮎と譯してあつた上に、「曲相から云つてもこれは鮎が早瀬に躍る有様をうつしたものである。従つて Forelle は鮎と譯するのが正しい」と或る音楽家の意見を附してあつたが東洋特産の鮎がどうして歐羅巴の川に躍ることゝなつたのであらうか。シューベルトが見て以て感興を湧かしたのは、美しいファレツレ即ち鱒が急湍を溯上する雄大な有様であつたらうと思ふ。我等はその曲を耳にすることゝ、水煙を立て、清流を無二無三に溯る鱒の雄々しき姿を思ひ泛べるが、鮭や鱒の活躍振りを見たこともなき姿を思ひ泛べるが、鮭や鱒の活躍振りを見たこともなき日本の音楽家には、その有様を現はした樂の調べを耳にしても、ファレツレの姿が浮ん

魚 界 挿 話



不 定 芽

で來ないのであらう。獨逸語の Forelle を鮎と譯するのが正しいか正しくないか、公衆を相手にする場合には今少しく科學的に考へて斷案を下すやうにしてほしい。

### 甲斐のうつかひ

外國のものを尊崇する風潮にとらはれてゐる人々は、やれ紅鱒やれ河鱒と、米國あたりの魚を移植しては喜んでゐるが、日本の河に鱒の類がほしければ、遠く太平洋の彼岸を望む必要は少しもない、東京近くでは桂川や荒川の上流に、美しいヤマメが潜んでゐるではないか。大阪附近では吉野川や熊野川の水源近く姿やさしいアメノウヲが銀鱗をかゞやかしてゐるではないか。北海道の河に棲むヤマメは正真正銘の鱒の幼魚である。ヤマメやアメノウヲは一生を河で過す一種の鱒である。天ぷらにしてよし、煮てよし、釣つて面白し。近頃これ等の魚族が釣客の間にもはやされるやうになつたのは、まことに無理からぬ話である。己が脚下を顧みず、ひたすらに海のかなたを望む人々に、先づこれ等の佳魚を味はせて見たい。

「げにや世の中を、うしと思はゞ棄つべきに、その心更に夏河に、鵜使ふ事の面白さに、殺生をすはかなさよ」と謡曲鶉飼に示されたその場處は、甲州笛吹川のほとりである。

甲斐のうつかひ



今でこそ鵜飼は長良川と相場がきまつたやうな観を呈してはゐるものゝ、富士川沿岸には親子相傳の鵜使ひが數多くその居を占めてゐる。然し碧潭藍を湛ふる甲斐の荒川に、紅燈を



甲 斐 の 鵜 使 ひ

つるしてさんざめく遊覽氣分の鵜船が浮ぶ道理が無い。漁どる者はすべてわらじ脚半に身を固めねばならぬ。鵜のあとを追ふて一度や二度は瀧壺にころげ込む位の覺悟は持つてゐねばならぬ。あかくと燃ゆる松明ふりかざす鵜匠を先だて、岩をよち急流を渡つて暗夜谷間に漁るその様は、實に男性的で心地がよい。わけ入る水源近く、澄む水は氷の如く冷にし、魚は、夜目にもしろきヤマメである。東の山がしらむまであさりつくして、さて朝食に獲

て、彼の俗人が愛づる鮎の溯上をさへぎつてゐる。パツと飛び立つ荒鵜がすくひ上るその物をあぶるその快味、佳魚の味と共に忘れがたなの思ひ出でとなる。

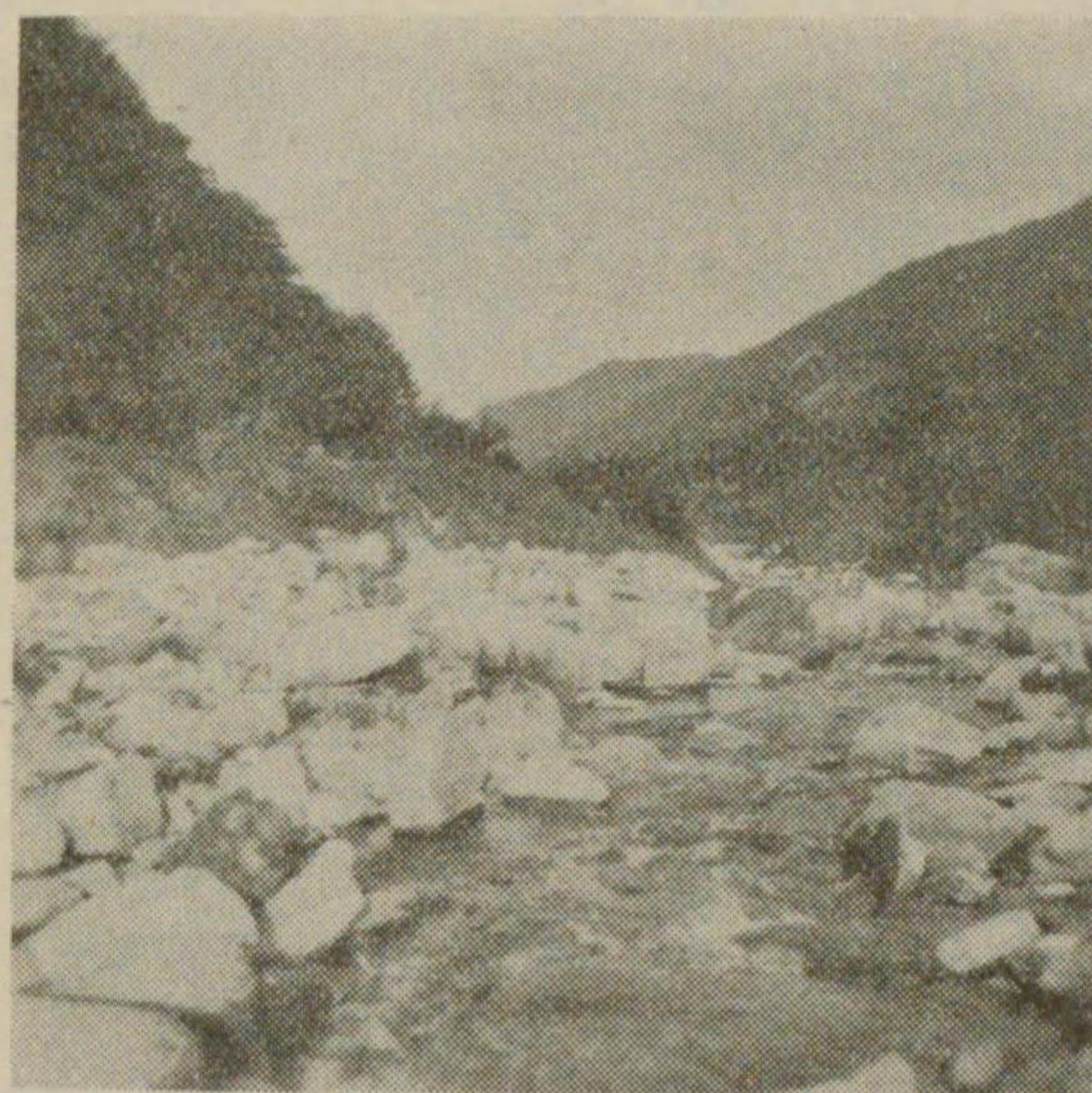
過ぐる年の夏、筆者が鵜を浮べたのは中央線笹子驛の西、笹子峠の麓を流るゝ笹子川であつたが、假の宿とした笹子温泉の池水には、清楚なヤマメが銀鱗をかざやかに我等を待つものゝ如くであつた。鵜匠は山一つ越えた笛吹川のほとりから雇つて來たが、みやびたるその名にそぐはぬ眼光炯々たる荒男で、胸からかけた頭陀袋に松明用の松の油木を押し込み、幾千度流を照らしたであらうかざり籠を縛りつけた長い鐵棒を右脇にかい込み、左のこぶしに鵜をとまらせ、草鞋ばきでスックと立つたその姿、瀬をはやみ岩にせかるゝ谷川に躍り狂ふうろくづも、これでは中々たまるまい。

川の邊に勢揃ひして月の落つるのを待つた一行は、時分はよしと暗い溪底に下り立つた。ドドッと岩を嚙んで流れ落つる水のとどみに、嬉しげに羽ばたきをした鵜が早や浮んでゐる。ソレソレッと差し出すかざりの下にうごめく魚影をジッと見入つた鵜の姿が、俄に消えて大きな波紋を描き出す。首をのべて水底深くわけ入つた鳥の姿が、暫らくするとポカリと浮び出る。そして嘴には斑紋鮮なヤマメを咬へて得意氣な様をして見せるが、暫し獲物を



不定芽

手玉にとつて、落ち来る魚體をスッと呑む。かぶり火が又動く。鶉は随つて水にむぐる。一尾二尾又三尾、前胃がはち切れそうにふくれたのを見すました彼の鶉匠が、鳥の口に手



甲州笹子川

をかけて魚籠に獲物を流し込む。かくして饑をいやさんと鶉がすなどつた佳魚の一つくを、人が根こそぎ取り上げる。苔むす石にまるび、流に伏していさりあかした鶉匠の魚籠は次第々々に重くなる。されど佳魚に舌鼓を打つた筈の鶉の胃袋は依然として空虚である。曉の星を仰ぎつゝ火をたいてヤマメを炙る人の姿を、無念げに眺め入つたまつ黒な鶉が、下さいよ。胃がからつぽでは、鶉も働き甲斐がありませんや」と愛鳥の喉をしめた糸をゆ

たまり兼ねたかグーグーと奇聲を發して魚籠にとびついた。「旦那ほうびに二三尾やつて下さいよ。胃がからつぽでは、鶉も働き甲斐がありませんや」と愛鳥の喉をしめた糸をゆるめながら鶉匠が筆者を顧みた。ヤマメはやれぬソレツと投げ與へた骨の堅い鰓をのみ込んで鶉はグーグーと挨拶をした。曉かけて一羽の鶉に捕らせたヤマメを籠に山と積んで歸路に就いた都の人は考へた。

「俺も亦搾取階級の一人だナ、鶉にして心あらば鰓を味ふて何と感じたであらう」と。朝まだき黒煙を吐いて笹子驛をすべり出た列車には、都入りをするヤマメが氷につままれて積まれてあつた。そしてその籠を抱いた者の口から、「げにや世の中を、うしと思はば棄つべきに……」と鶉飼の一節が流れ出た。

甲斐のうつかひ



不 定 芽

### 天魚を求めて大和路へ

初夏會遊の地甲州の溪流にヤマメを追ふて科學的渴の幾分を癒した私は、地圖を開いて更にアメノウヲを追ふ可き地域を物色した。千古の老杉立ち込む大和アルプス——私の眼は直ちにそこに走つた。熊野灘に注ぐ北山川、伊勢灣に注ぐ宮川並びに大阪灣に注ぐ吉野川の三つを送り出す大臺ヶ原こそ、われ等を待てる屈強の地であると直覺した。

大臺ヶ原は日光山に比すべき生物學界の寶庫であるが、植物學上の調査がその緒について居るにも拘らず、動物の方面は殆ど零である。そこで私は同行者として山椒魚の研究家田子勝彌氏を物色した。なぜなれば大臺方面には珍しい山椒魚がをるとの噂が高かつたから。

### 室 生 川 へ

榛原から名張へかけての山中は、かつて蘭人シーボルトが巨大なる山椒魚ハンザキを獲てこれを學界に報告せる地方であり、その後佐々木忠次郎博士、石川千代松博士などが親

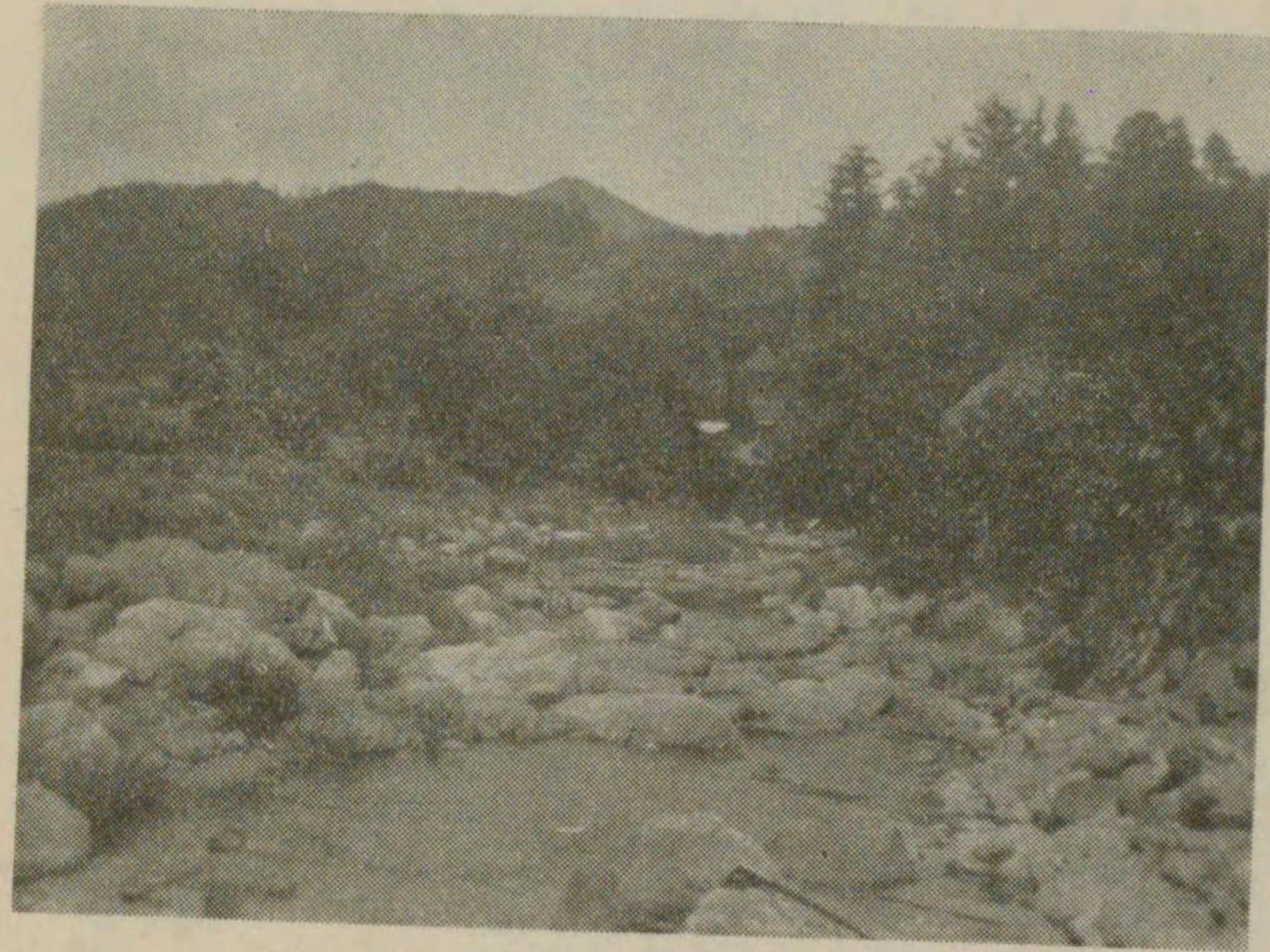


天魚を求めて大和路へ

「ごまあ」を釣る

しく研究に行かれた歴史を持つて居る山椒魚研究の發祥地であるが、岡山方面や箱根などが吹聴宣傳された結果、今ではこの地方に眼を注ぐ人が絶無となつた。蛇の道は蛇とでもいほうか、榛原へ踏み込んだ田子さんはすぐさま室生川へと急いだ。果してそこには大きなハンザキが居た（土地の人はハチクイと呼ぶ）。しかもその昔シーボルトが圖示したのと全く同じものが居たが、名利室生寺を過ぎ、下田口より山深くわけ入つた溪流で、ゆくりなくも私は數尾のアマゴを釣上げた。體側には暗紅色の斑點が連り、側線





(流上川野吉) かみすのごまあ

に沿ふて赤條があるのみならず、尾緒は縁端直線状で深く切れ込んで居ない。まことに美はしいアメノウヲであるが、場所は一里からかけ離れて居ないから、村人がめざめて相当手段を講ずれば優雅な室生寺見物を兼て京阪地方の大公望を引寄せることが出来るかも知れない。

途上室生川の一支流で我等は山椒魚の採集を試みた。山深く清流をわけて進むうちに、我等は學界未知の山椒魚の幼魚多數を捕獲したので、田子氏の満足はこの上もなかつたが、不思議なものを興がる人間もゐるものかなと遠見をして居た

人夫の一人が、「旦那方はイモライはいらんかね」と口を出した。「あの腹の赤いイモリのことかね」と反問する聲を聞いた人夫は、「いや、まつ黒い奴どす。たつた今この岩の下で逃がしたんや」と答へた。すると、見る／＼、田子さんの眼は輝やいた、

「それがこの山椒魚の親に違ひない、イモライを捕つてくれ」と奇聲を發したが求むるものは影をも見せなかつた。

### 吉野川を遡る

榛原方面の探査に意外な成功を収めた一行は、道を柏木に取り、それより吉野川に沿うて目的の大臺へと進み出した。途中柏木で取つた晝食の食膳に美事なアメノウヲが飾られてゐるのを見た私は、形や斑紋を仔細に點檢しながらこれを味はつた。確に關東のヤマメとは違つて居る。

はる／＼出かけて來た甲斐があるといふ喜びに充ちた私は、腰を下した川上ホテルの若者に來意を告げて手馴れた漁夫の周旋を頼んだ。彼は心地よく引受けて呉れたのみならず、自ら交番に走つて御法度の漁具を使ふ許しをすらとつて呉れた。

天魚を求めて大和路へ



天下晴れて得意の漁具が使へると聞いた近所の若者が、我も我もと助太刀に出て来た。彼等の活躍は行くこと里餘ならずして忽ち美事なアメノウヲ數尾を私の手に投じてくれたが、行く行く入之波でもこれを手に入れた。又五色温泉附近では、自ら糸を垂れたが、東京から持參の擬餌が美事功を奏して美はしい姿のそれを釣り上げた。

吉野川、殊に柏木から上流は紺碧の水がすく／＼と聳ゆる老杉の間を流れる清域であつて、アメノウヲの棲みかとしてはこの上なき地であるが、心なき人々の濫獲の結果は日に月にその數を減退せしめてゐるとの嘆聲を聞く。

「漁具を限定しても禁漁の法令を出しても、お巡りハンが山へ行かはらんによつてあきまへん」と或る村人が囁いたが、これは確かに眞理を物語つて居る。その證據には、わが行く道にも禁制の漁具を振りまわして居る幾組かの村人を見た。百の法令も無知の民には役立たぬ。郷土を愛せよ、汝と汝の子孫とに與へられたる郷土の寶を愛護せよ。私は心なき人々がこゝにめぐめて我物ならぬ自然を新に凝視せんことを切に冀ふ。

### 宮川の水源へ

吉野川の水源を左に俯瞰して山路を攀づる事里餘、標高一一九四メートルを算する分水嶺の頂に立つ。それを東に下れば身は三重縣の人となつて早くも宮川のさゝやきを聞く。

我等はその溪谷の清き流れに、多數のハコネサンセウヲを見出した。しかも田子さんを喜ばした他では見られなかつた發育期のものを生捕つた。伊勢にハコネサンセウヲが分布してゐる事は前から知られて居たが、一步山を越えて大和から伊勢路へ下り立つたばかりで、すぐさまそれに出逢はんとは豫期して居なかつた。或る種の動物には越え難き分水嶺の面白味はそこにあるが、この意味において紀和勢の三州に水を分つ大臺山塊の三津川落山は特筆すべき境域であるといはねばならない。

物すごき溪底に佇立した私は、碧潭藍を湛ふる中を王者の如き姿して泳ぎ行くアメノウヲの群を見たが、宮川の水源大杉谷には熊がゐるといひ聞かされた話を思ふて、そこ／＼に引上げた。

大臺教會長古川翁の命はその夜部下の若人をその溪に走らせた。物馴れた彼は太やかなアメノウヲ數尾を手捕りにしたが、日の出岳に御來光を拜して教會に歸着した私の前にそ

天魚を求めて大和路へ



不 定 芽

の穫物は恭しくさげられた。吉野川と同じ種類である。しかしこの數尾の標本には、山路數里を突破してやみを走れる人の情けが籠つて居る。

### 大臺教會長親征

宮川に下つた私と分れて先發した田子氏は、大臺の南を紀の國に流るゝ北山川の支流に又珍らしき山椒魚を見出した。思ひがけなき福運に早くも満足の意を表した田子氏は一夜を大臺山頂に過して、早くも廻れ右の用意にとりかゝつたが、「今日は教會長自らが御兩所の採集をお助け申す」と袂を握つて放さぬ山の王者古川嵩翁の好意にほだされて、北山川に下り立つ我等の間へと又もやめでたきその姿を現した。

大臺教管長の職衣をかなぐり捨てた山の王は、小鷹網片手に甲斐々々しき漁夫の姿になり變つたが、蔦かづら生ひ茂る山路をまじらの如く馳せめぐるそのすこやかさ、六十路餘りの老翁と誰がこれを受取らう。その昔翁はこの神武親征の地に狼を抱いて寝たといふ。開山の苦心空しからず、大臺の鳥獸草木今は悉くその威令に従つてゐるやうに思はれる。道すがら太やかな倒れ木を指して翁はこの下を探れと命ずる。總員力をこめてこれをまろば

せば、足もとに體長四五寸もあらうか、大きな山椒魚がヒョコリと現れた。「イモライが居た!!」と田子さんは藥罐頭を振り立々躍り上つたが、得意満面の教會長と、とろけさうな表情をして側に立てる我が田子さんと、それこそ劇的シーンとでもいふべき有様であつた。さいさきよしとことほいだ管長は、西の瀧の上流、東の川の水源にわれ等を導いて手練のすなごりを始めたが、渇水期のことゝてアメノウヲは巨岩の影に身を潜めて動かうともしない。手を水深くさし入れば、生きながらこれを捕ふること極めて容易であるが、人跡未踏の聖境と思ひしこの幽谷に、私は又もや狼藉の跡を見出した。そこゝに山椒の皮がちらばつて居る。二十、三十とアメノウヲの腸が抜き出されてゐる。人類はこの聖域にまで押し上つて毒流しの慘を敢てしてゐるのである。

北山川には今は澤山のアメノウヲが居る。しかし神武の昔から彼等に與へられてゐる安住の地は、かくしてとことほに消え失せんとして居るのである。

豫期に反した不漁に氣をいらだてゝ居る折も折、みなかみより三人の密漁者が現はれた。重たげに彼等が手にせる魚籠を見た管長は、怒氣心頭に發したものと見え、「この神

天魚を求めて大和路へ



不 定 芽

域を荒すのは何者ぢや」と一喝を食はせて穫物を強制處分に附したが、「これだけのアメノウヲを穫るには一日を棒にふらねばならぬ。われ等の誠意を見そなはす神々が人をして取らせて下さつたのぢや」と獨りほゝ笑む管長と顔を見合せたその瞬間、期せずして兩者の面上には笑がたゞよつた。

その夜大臺の山上には天魚を賞美する聲がそこゝに起つた。しかしわが食膳に上つたものは神與のものであつたか、將又管長好意の網にかゝつたものであつたか、流石の私にもその判別はつきかねた。

突破す尾鷲の險路

朝霧につゝまれた日の出岳の脚下に伊勢の海が見える。尾鷲の港にすべり込む漁船の姿、私はこれを見て俄に海が戀しくなつた。大臺を辭するその朝、笠捨の險を越えて熊野川を下る企てをガラリと棄てゝ田子さんと山に分れた私は、一氣に尾鷲へと馳せ下つた。この學を知つた古川翁は「それはとんでもない悪路ですぞ」と心もとなげにいはれたが、健脚をほこる我等は何のそのと東に足を向けて歩み出した。

千古の密林に覆はるゝ深山幽谷、散り敷く落葉を踏んではげづりなす巖頭をよづるその苦心。自ら撰んだ險路については、十二時間を歩きつめて漸く人里に出たその一事を記して讀者の推察に任せるが、老杉生ひ茂る古和谷官林を貫流する谷川に、人影を恐れぬアメノウヲが群居するのを見て覺えず私は手を打つた。こゝは官林である。すなごりを許さぬ官林である。人類の摩手の及ばぬ所、このさゝやかな小川にすらわが求むる美魚は充ち満ちて居る。保護の妙諦は實にこゝにある。國家の保護に生くるこの魚群を眺めて私は益々無知の人々を反省せしむるの要を痛感したが、汗にまみれて人里に近づいた刹那、私は殺生禁斷のこの場所に、ゆくりなくも網を手にして魚を迫ふ一團の人影があるのに驚かされた。いぶかしげな視線を投げつゝアメノウヲ數尾をわけて呉れたその一人の好意に對するにやぶさかではないが、禁漁區にすなごりする理由をたづねた私の問に對する彼等の答へは意をなさないものであつた。「われ等は山林事務所のものである。すなごりは勝手だ」と。人民の立ち入る事を固く禁じて保護巡邏の任に當たる役人自らがこれを荒して顧みぬ。世にこれ程の矛盾があるものであらうか。

天魚を求めて大和路へ



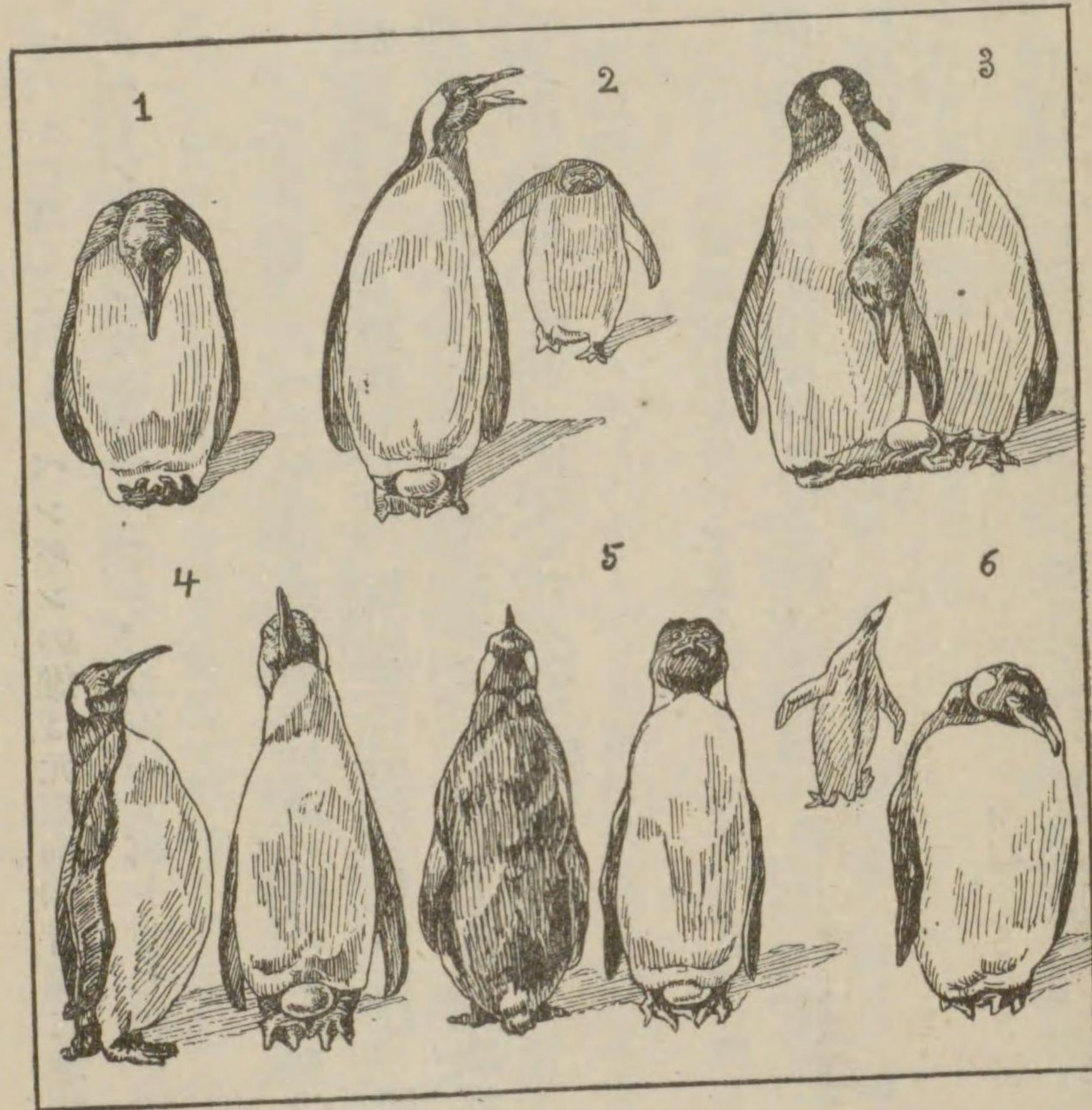
不定芽

グッド・ド・ファザー

夏が来る。學業に疲れた愛兒の手を取つて、善き父が、共に山を攀ち海に親しむ其夏が来る。

グッド・ド・ファザーの影には、虚榮の夢を追ふて家をからにして居る母が居ると云ふ。然し次代を繼がせる大切な我子を守り育てる其責任は、決して母にのみ負はすべきものではない。笑はゞ笑へ、我は甘んじて善き父たらんと志す人々の爲に、他の動物界にひそむ善き父を茲に尋ねて見る。

南米アルゼンチンの特産であるアメリカカ駝鳥の雄は激闘これつとめて漸く其配偶者を手に入れるが、雌が卵を生んだとなると早速それを奪ひ取り、自ら抱卵して雌を近づけない。雛にとつては生みの母より育ての父の方が有難かるべき筈であるが、斯の如き有様を見て尻に敷かれた亭主と其雄をさげすむのは大きな間違である。



グッド・ド・ファザー

脚が短くて絶えず直立の姿勢をとつて居るキングペンギンの雌は、卵を其股間に挟み、立つたまゝで之を暖める。飢えて食を求めたくなると驢馬の如く一聲高くないなくが、それを聞きつけた雄はあたふたと駆けつけて来る。雄は先づ雌と肩と肩とを並べて立つが、斯くと見た雌は股間の卵をそろゝ取り出して雄の股間に移し、あとをも見



不 定 芽

ずにかけて出して行く。ペンギンの雄は元來抱卵育雛に趣味の無いものである。然しベター  
II ハーフが助を求めたとすると、お家の大事と暫し卵を預つてやる。

いつのことであつたか或る動物園で丹頂の鶴が巢ごもつた。約一ヶ月も立つた頃抱いて  
居た卵の一つが孵化したが、雛の愛に引かされた母は、残りの卵を蹴とばしてこれを顧み  
ようともしなかつた。今まで家事には無關心であつた雄が、それと見て卵を巢に收め、自  
らそれを抱きて暖め、日ならず又雛を孵化させた。

「とき」は雌雄力を併せて巢を作り、兩者交々巢に座して卵を暖める。雛が孵化すると  
雄と雌とが代る代る餌を持ち歸つてそれを養ふが、鳩も然り、雀も然り、このような例は  
鳥界に決して珍らしくない。

中歐地方に産する産姿蛙と異名を取つた或種の「ひきがへる」は、珠數の様にながつ

た卵を地上に生みつける。雄は二三週間卵塊を脚にまきつけて運び歩き、最後に池中に  
それを放つて蝌蚪を孵化させる。

又嘗つてダーウケンが智利で見つけた或る蛙の雄は、雌の生んだ卵塊を嚥んで喉の下  
の袋に收め、蝌蚪が孵化して獨立し得るまで、己が口中で之を守り育てる。

右の様なグッドローファーは、魚界には又ざらにある。北海道方面に多い「とげうを」  
の雄は、樹や枝や草を集めて小鳥の巢に似た球形の巢を作り、雌魚を引き寄せて其中に産  
卵させる。雌は己が生んだ卵を喰はうとするので、雄は巢の口に立ちはだかつて懸命に之  
を追ひ退け、夜のも眠らず巢を守つて幼きものを孵化させる。

又「たつのをとしご」の雄は腹部に一種の袋がある。雌は其中へ産卵する奇習があるが、  
グッドローファーは其卵を守り育て、孵化させるのみならず、獨立自營の道がつくまで、  
世に出た幼魚を腹に收めて見守つてやる。



不 定 芽

或る夏のこと筆者は助手代りにもと、兒の一人を連れて大和アルプスへと採集に出かけたが、其記事を読んだ或る未知の小學校長から、次に示す様な手紙を受取つた。

謹啓炎暑の候貴下には益々御活動御研究の趣新聞紙上にて拜見致し、深謝の至りに御座候。特に御令息を御連れになつて山深く御研究に御出で遊ばされたとのこと、此家族的温か味のある處が第一推奨する處に御座候。最高學府の人々は眞の教育を忘れ我子を顧みざる人がある様常に聞及び、小學幼兒教育に身を委ね居る小生等は内々不快な感を持つて居る事に御座候。茲に今回の記事を見て嬉しく／＼愉快に之を拜見した次第に御座候。此感を持つ人は日本中どこかに然も多くの小學教師中に潜在する事と存じ候(下略)何氣なき我等の行動を、意外な方面から觀察して居る人の潜んで居るには驚いたが、斯る意味でグッドローパーになることは、誰しも異存のないことであらう。

魚界の不良少年

藍を染めた奔流、岩をかむ山川の流れ、躍るヤマメの名を知らぬ人々も、足一たび北海道の地を踏めば、香魚よりは更に味覺をそゝる佳魚ヤマメの名をしかと腦裏に刻んで家づとにするのが昔よりの習ひである。

姿香魚よりもゆかしく、味更に上乘なヤマメは、石狩川に釧路川に、北海の清流いづくとしてその影を見ざるはなく、竿を肩にするもの必ずそのあとを追うて一日の行樂をほしのままにすること、我等が香魚を求むるとほとんど同じである。扱てそのヤマメとは如何なる魚であらうか。

北海道に産する鱒には、ベニマス、セツパリマスおよびサクラマスの三つを區別し得るが、産卵期に石狩川などをのぼるサクラマスをアイヌはイチヤニといひ、ヤマメをポンイチヤニと呼ぶ。ポンとは小さいといふ意であつて見れば、アイヌは古來ヤマメをサクラマスの幼魚と信じて居るものらしい。

魚界の不良少年

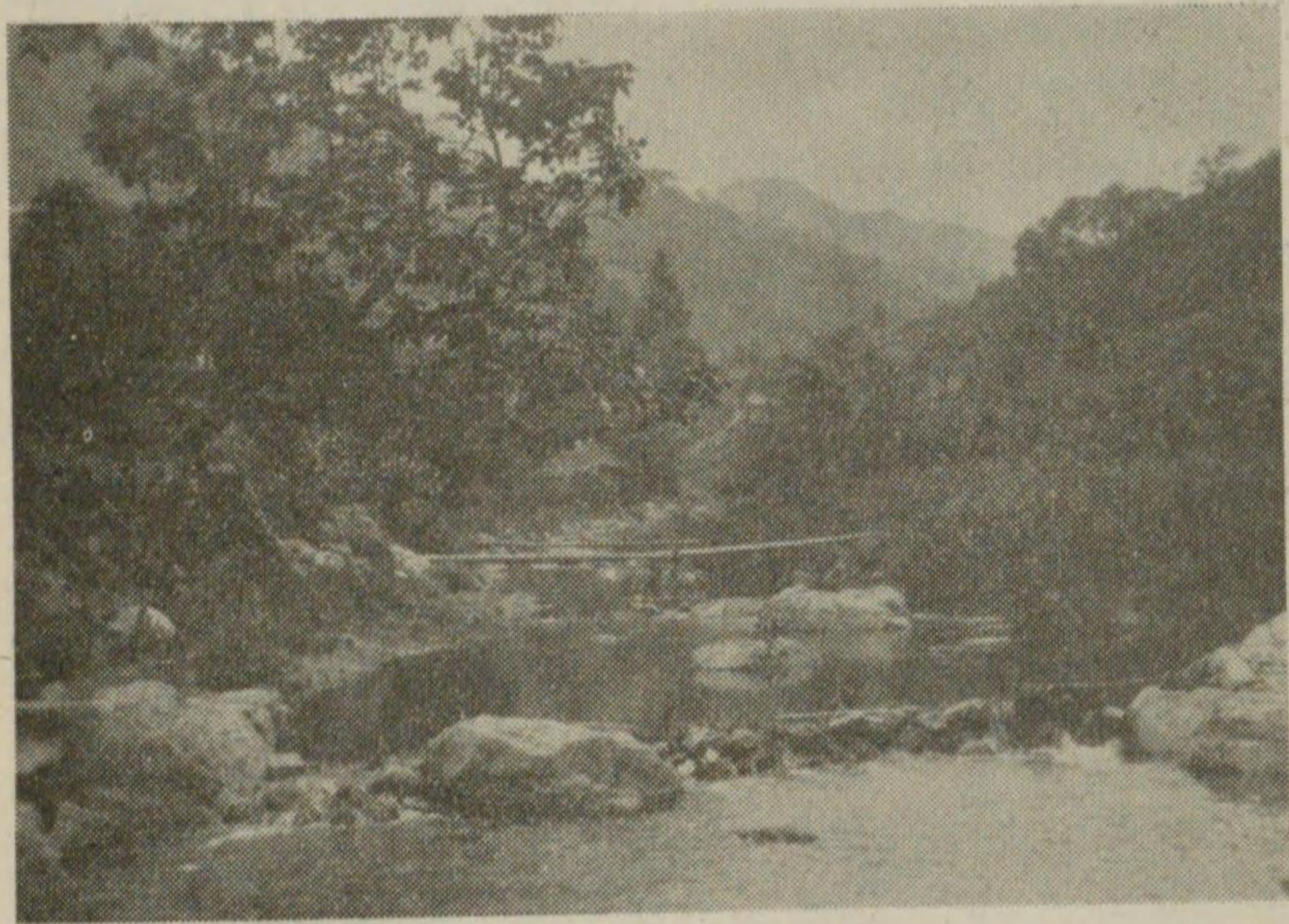


不 定 芽

ヤマベとサクラマスとは、色といひ、斑紋といひ、似ても似つかぬばかりか、一は河にすみ他は海に育つ相違がある。従つてヤマベは果してサクラマスの幼魚であるかどうかは、多年解き難きなぞの一つとされて居たが、河川のヤマベを濫獲すれば海におけるサクラマスの漁獲高が激減する事實と、サクラマスの人工孵化試験の結果とが相待つて、近時これに關する解答がやゝ正しき方向へと向つて來た。

五月から六月下旬にかけて石狩川の河口などに群れ來るサクラマスは體長二尺餘り、銀色目もはゆるばかりであるが、不思議にもそれらは凡て雌魚で、雄は少しも姿を現はさない。然るに漁期を遙か過ぎた秋半、河をさかのぼる幾十里の水清き最上流に、忽然またサクラマスの姿が現はれるが、いづくより出現したのかその群には成育した立派な雄魚が相半ばして居るのみならず、雌雄共に全身美しい櫻色を呈して生殖素の熟せることを思はせる。よつてこれをサクラマスと呼ぶのである。かゝる雌魚から採卵して受精孵化せしむればそこに彼のヤマベ型の幼魚が現はれる。

サクラマスの卵から生れ出た幼魚を池中にとち込めて海に歸さないと、三年四年と経過



流溪の父秩る躍は「めまや」

しても依然としてヤマベであり、小さいままで雌雄共に生殖素が成熟する。して見ればサクラマスは容易に淡水に順化する性質をもつてゐることが明かであると同時に、ヤマベはサクラマスの幼魚であることも疑を容れる餘地が無い。それはそれとして置て、そこに尙一つの疑問が残される。ヤマベがマスの幼魚であれば雌雄共に海に下り、ある時期には河川にその姿を斷つべきであるのに、北海道の河川到るところ常時ヤマベを見るのみならず、その大多數は雄魚である。然も秋にかけてヤマベの色はさびて金色を帯びた黒褐色を呈し、明かに生

魚界の不良少年

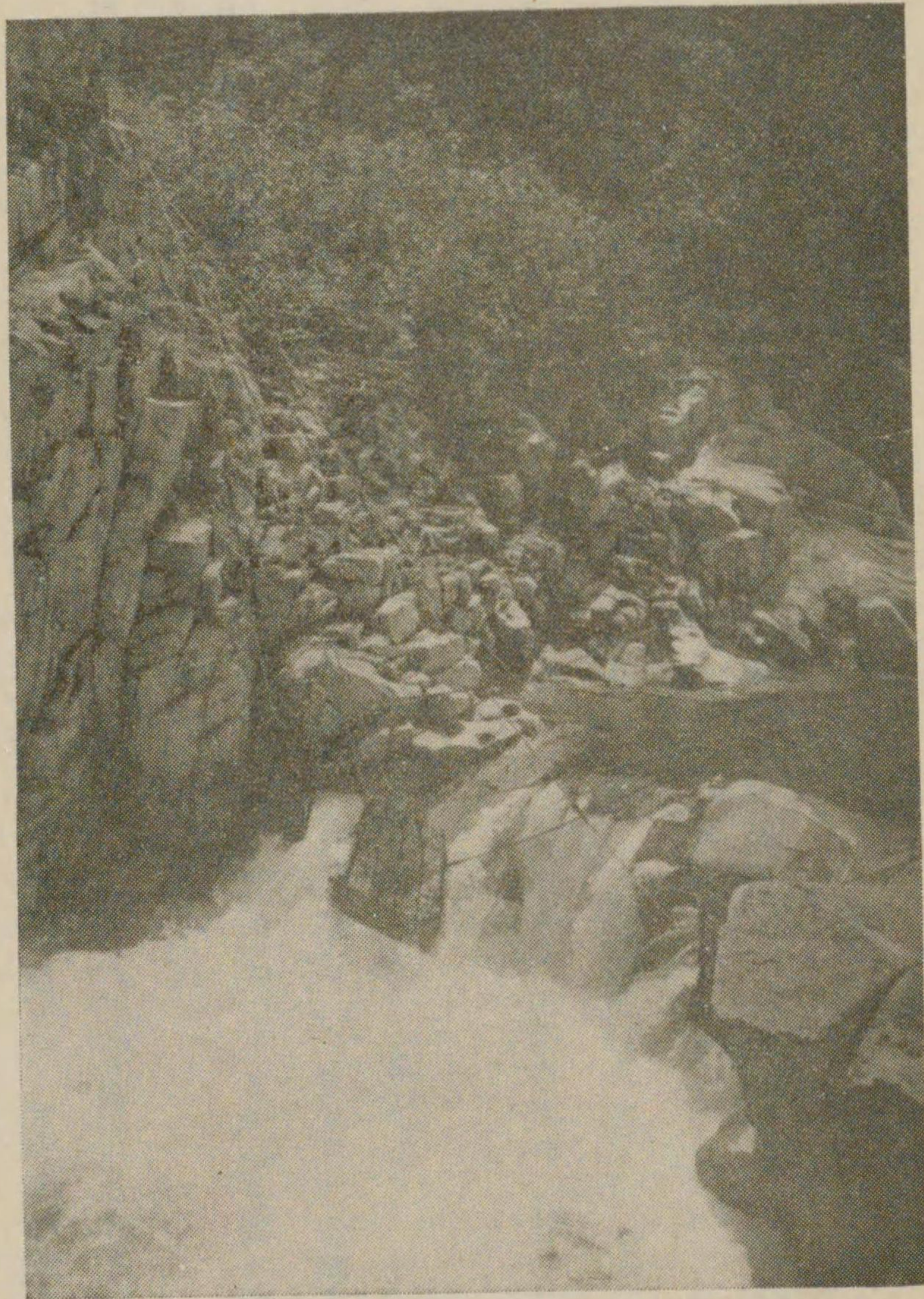


不 定 芽

殖素の熟せることを表示する。

美麗なサクラマスの雌魚が、連つて産卵する水清き浅瀬を熟視せば、黒い小さなヤマベが幾十となくそのあとを追うて精液を注いでゐるのが目に映つる。して見れば、河に留まるヤマベの雄もサクラマスの雄である。海から河をのぼる巨大なサクラマスの雄を雄魚の本體とせば、このやうなヤマベの雄は果して何であらう。

サクラマスの卵から同時に孵化した幼魚でも、雄は一二年雌に先んじて成熟する。従つてヤマベの雄魚には體長僅々三寸内外にして早くも巨大なサクラマスの雌を追ふものが現はれる。もし雌魚に伴ふ大形の雄魚があれば、怒つてさばへなす群小ヤマベを追ひ散らす様は見るとまた一興である。これを要するに川に生れたサクラマスの雌魚は幼くして一路海に下るが、雄魚の大多數は河川を永久の居としてヤマベに終始し、その少數が海に出でて肥大するのである。櫻色に美装したサクラマスの雌を途に擁してそのあとを追ふ色黒き小魚ヤマベはいはゞ早熟せる不良少年である。語を換へていへば北海の佳魚ヤマベは行くべき道を踏み迷うた魚界のモボである。而して内地のヤマメは即ちヤマベそのものである。



福島縣南會津郡川村大字桃の嶮、瀧の中央にあり  
のは跳躍する櫻鯛を捕獲する籠(小南清氏撮影)

魚界の不良少年



不 定 芽

紅葉山を染むる頃ほひ利根や信濃川の上流にさかのぼつたサクラマスの雌魚をいどむ早  
熟兒の姿を見よ、秋の日ながに魚界の不良少年の活躍振りをジッと眺むるのも一興であら  
う。

### ナイアガラの匙

夏たけて早やすゞ風の立ちそむる頃であつた。中宮祠湖の探查を了して歸京の途に就い  
た筆者は、發車間際に日光驛に馳せつけて、目の前に見えた二等車へそゞくさと駆け込ん  
だ。左隣には品のよい米國人夫妻が座を占めてゐる。右隣は英國人、向ふの座席も外國人、  
通譯らしい男が只一人日本人であつたばかりで、見渡すところ避暑歸りの連中か、乗客の  
凡てが紅毛碧眼のやからのみであつた。

汽車は進む、無遠慮な外客の話ははづむ。聞くともなしに耳を聳てると、片隅に陣取つ  
た一組の連中の間に怪しからぬ話が進んでゐる。チェッコスロバキア人と名乗る一人がポ  
ケットから日光土産の小さい手箱を取り出し、中々よく出来てゐるが少し値が高いやうだ  
と云ふ。その尾についてニヤ／＼笑つてゐた四十がらみの男が、

「日本は外人と見れば、法外な値段で品物を賣りつける國だぜ。こんなところで財布の  
紐をゆるめたらどんな目に遇ふかわからない。お互に用心しやうぜ」

ナイアガラの匙



不 定 芽

と云ふ。

「その通り、その通り。僕は昨夜日光の町で床屋へ行つたのサ。ところが散髪がすんだら店の親爺が二圓呉れと云ふ。

お合憎様、僕は之でも日獨戦争の際従軍して日本軍の捕虜になつてゐた名譽ある軍人なのだ。そして日本に捕へられてゐる間に勉強したことが役立つて漢字が讀めるやうになつたのだ。見れば壁にはつた賃金表に、散髪三十五錢也と書いてある。僕はだまつてそれを指さした。そして三十五錢投げ出して出て来たよ」と獨逸人らしい男が合槌を打つ。

櫻の國を咒ひ日本人をこき下ろす聲が車内にみち充ちて来た。傍若無人に嘲しつては快哉を叫ぶつら悪い顔が、次から次へと殖えて来た。大變な國だナと思つたららしい隣の婦人が不安げに口を開いて、「自分は陶器を求めたいのだが、横濱で買つたがよいだろうか」と排日の音頭取りをつとめてゐた男に話しかけた。

「以ての外です。何でも支那に限る。安くて品がよい。支那人は親切ですぜ、日本は駄

目々々」

と彼ははき出すやうに答へてジロリと筆者の顔を見た。

チャイナ、チャイナと紅毛人達が云ふのを何と心得たのか、怪しげな英語で御用をつとめてたガイドが、突拍子もない大きな聲を出して、

「チャイナ、イズ、ベリ、グット」

とつけ足した。恐らくはチャイナを陶器と速断し、陶器は日本に限ると云つた積りであつたのであらうが、それを耳にした外人共は、手を打つて笑ひこけた。のみならずあの英語でよくもガイドがつとまるものだナと感服した筆者も覺えず笑を噛みしめた。

話は五分前に溯るが、筆者がナイヤガラの壯觀に膽を奪はれ、脚下に渦をまいて流るゝ奔流を眺めながらパツファロー行きの電車の停留場にイんだのは、群鴉しきりにねぐらを求むるたそがれ時であつた。遙に警笛の音を立て、驀進して来る終電車を逸しては、バスを豫約してあるその夜の急行に乗るすべもない。切符を購ふて不圖傍の賣店を窺ふと、

ナイヤガラの匙



不定芽

くさぐさのナイアガラ土産が並べてある中に、飛瀑を刻んである一本の銀匙があるのが目についた。外國を旅する毎に地名や大學のマークなどが刻んである銀匙を集めて來るのが道樂であつた筆者は、飛びつくやうにしてそれを取り上げた。そしていくらかと尋ねて見たら、店の親爺が近づいて來る電車に目をくれながら、三弗五拾仙と吹きかけた。今までそんな高價な匙を求めたことのなかつた筆者が、値切つてやらうと一步を踏み出したその瞬間乗らねばならぬ電車が音を立て、ホームにすべり込んだ。いま／＼しかつたが握りしめてゐた銀貨を叩きつけた。そしてほくそ笑む親爺の手から銀匙を奪ひ取つて電車へころげ込んだ。

ナイアガラの匙は一本七圓である。その夜鐵路に夢を乗せて走り乍ら、筆者は胸算用をすることを忘れなかつた。高い高い、恐ろしく高い。このやうなものを買ひ集めては、財布は忽ち孔があく。惡どいナイアガラの商人に嘗められて、爾來銀匙集めはフツツリと思ひ切つた。

覺えずガイドの失策を笑ふた筆者の顔を、隣りの婦人がジツとのぞき込んでゐたが、汽車が宇都宮を過ぎた頃、こちらに向き直つて、「英語がわかるか」と問ひかけた。「然り」と答へたその序に

「あなた方は先程から大分日本の悪口を叩かれたが、遊覽地が我國の代表地であると思はれては大迷惑だ。拙者はナイアガラで三弗五十仙の匙を賣りつけられた被害者だが、遊覽地で旅人に高いものを賣るのは、インターナショナルサイコロジイですよ」

とつけ足した。  
だまつて聞いてゐた品のよきそんな主人公が、口にしてゐた葉卷を投げ棄て、膝を乗り出した。そして、

「インターナショナルサイコロジイとはまことに面白い云ひ分だ。僕達は布哇大審院のカーク判事夫妻であるが、米本國へ歸ると、どこでも田舎の椋鳥と見て高いものを賣りつける。日本ばかりが悪いのではない、大きな顔をしてゐる國々でも、祿なことはないですよ」

ナイアガラの匙



不 定 芽

と話の糸口を切つて隔意なき話に打ち興じた。カーク判事夫妻と筆者との話がはづむに連れて、大きな顔をしてゐた排日黨が氣まづい様をしてだまり込んだ。そして列車が赤羽に着いたら、その多くがあたふたと車を替えて電車に乗り移つた。僅々二時間餘りに過ぎなかつたこの旅は、今思ふても胸のすくやうな愉快なものであつた。

その後時過ぎて布哇大審院と銘を打つた封書が筆者の手許に到着した。外國の法廷から何の呼出しぞと封を切つて見たら、その中からカーク判事と自署した手紙が現はれた。

「自分達夫妻は世界漫遊の旅を終つて只今歸着致しました。インターナショナルサイコロジを論じた日光よりの旅は、時が甚だ短かつたが我等にとつてまことに印象の深いものでありました。ホノルルへ御出での際は御立寄り下さい、歓迎致します」

とはその文意の大要であつたが、心と心とが相觸れるれば、その間國境もなければ人種の距りもない。南風薫るワイキキの濱を、今一度さまよひ歩るく時を與へらるれば、訪ねて見ようカーク判事を。

親 さ ま ざ ま

西さんはさる公立中學の教頭であつた。今日は己が子が芽出度S中學を卒業するので、主客顛倒とでも云はうか、父兄席に收まり、親としての喜びを満喫しながら、式が始まるのを神妙に待つてゐた。聞くともなしに耳を傾けると、前に座つた市議らしい下品な男の一むれが傍若無人に語り合つてゐる。

「お宅の坊つちやんは、今度はどこを受験されるかネ」

「大分評判がよいやうだから、市の中學にしようかと思ふ」

「それはよしたがよいぜ、あの學校は實にけしからんことをするよ」

ソレ知つとるじやらう今日こゝを卒業する僕の二男坊を。あいつ小學校では相當の成績だつたし、お互の勢力範圍でもあるし、便宜があるじやらうと思つて、あの學校を受けさせて見たんじや。ところがどうじやらう。蓋をあけて見たら、はいつて居らんのだ。餘り怪しからんから校長室へ怒なり込んで行つたら、校長奴が補缺になつてゐるから安

親 さ ま ざ ま



不 定 芽

心せエとぬかし居つた。ネー君、苟しくも市議の子じやないか、補缺とは何事だ。俺はそんな残飯を子供には喰はせんと唐變木の校長をにらみつけてやつたよ。そしてその足で學務局長を尋ね、市議を無視する學校長の不都合を面責してやつたところが、局長が青くなつて平蜘蛛のやうにあやまつたよ。そしてどうかするから自分に任せて呉れと懇願した。

局長も隨分骨を折つたらしいがネ、公平無私を標榜する馬鹿校長がどうしても残飯でなければやれぬと頑張るのじや。俺もウンと癢にさはつたから蹴とばしてやつたよ。

君!! あそこはよした方がエ、ぜ。」

「そんな不都合な奴は、首にしたらいゝじやないか、ナー諸君!!」

「そうよ、俺もそう考へてゐるがナ」

残飯を喰ひそこねたその息子が、今日自分の子と同列で卒業證書を貰ふのかと思ふとおかしくもあつたが、神聖なるべき教育界を我がものゝ如く心得、一種の暴力を行使して惡を遂げんとする者共の正體を見せつけられて、西さんの心は暗くなつた。

花にさきがけて重苦しい入學試験シーズンが迫つて來た。舞臺はつとに轉廻した。そして西さんが、幾百の兒童とその親にとつて鬼とも見らるゝ場面が現出した。

朝早く郵便!!と投げ込まれた封書の一つを手にして西さんは苦笑した。差出人は某省某局長何の某とある。要件は封を開かなくともわかつてゐる。「ア、いやだいやだ、因果はめぐる小車の……か。今度は残飯を與へる役が僕に廻つて來た。はて黒かブチか、どんな瘦せ犬を引連れて、恐ろしい親共がやつて來るのかな」と、櫻の蕾を見入りながら考へた。考へながら束になつた郵便を机の上にひろげて見ると、近頃ついで音信をしたことのない人からの來狀が澤山にある。そうくこれは中學時代の先生の一人であつたナ。これは親戚の家で一寸顔を合はせたことのあるあの男だナ。何だつて急に妙な郵便がふへるのかナと思つて封を切つて見ると、文句は判で押したやうにきまつてゐる、久濶を叙するのは禮儀であるから致し方がないとして「陳れば」か「扱て」かの後が宜しくない。

「今回愚息御校を受験致し候に就ては……」

「あゝいやだナ、人の世の裏が見える、なすまじきものは教員だナ」



不 定 芽

と、西さんは大きな欠伸を一つした。そして手紙を屑籠へポンと投げ入れた。

澁茶を一杯すゝつて、さて今日の課程はと考へてゐるところへ、給仕が婦人の名刺を持つてやつて来た。見れば上級生の親の一人であるから遇はぬわけにもゆき兼ねる。こちらへと通されて、西さんの前へツカ／＼と進み出たその女は、海千山千とでも云はうか、墓が蛇を呑んだやうな面貌で、見るからに胸くそが悪るい。

「先生!! 特別の御願があるのですがネ」  
と、西さんがまだ一言も口を開かない間に彼の女は進撃して来た。

「先生!! ソラ政界で有名なG伯爵を御存じでしやう。あの方の御落胤が今度こゝを御受けになるんですよ。私そのお妾さんと大層親しく願つてゐるので、骨を折つて上げまじやうと申し上げたの。校長さんにも御願したのですが、先生も一つ尻押しをして下さいよ」

御落胤の尻押しをせよと云はれて、西さんの腹の虫が首を上げた。

「校長さんが引受けたらそれでよいじゃありませんか、それよりは貴女にとつて大切なことがあるのが氣がつかませんか。  
御氣の毒ですが、御令息の成績がこの通り不良で進級覺束ないかも知れないのです。  
御落胤の奔走をするよりは、先づ足もとの火を消したらどうです」  
落第點揃ひの成績を目の前に繰りひろげられて、婦人は青くなつた。そしてあたふたと西さんの室から逃げ出したが、そのあとを見送つて西さんはハッハハと笑ひこけた。  
よい氣分になつて歸宅して見ると、麗々しく水引をかけた三越の大きな包が西さんを待つてゐた。一筋縄ではゆかぬと思つたか、先廻はりをしたその婦人が、西さんの留守をねらつて本據をついたのであつた。  
御落胤と息子と一石二鳥とはよく考へたナと云ひながら、西さんは小包をかゝへて近處の郵便局へ出かけて行つた。身錢をきつて返送の小包料を支拂つて、「この戦は僕が負けだナ」と西さんはつぶやいた。



不 定 芽

「あんな女にまで踏みつけられて、すまじきものは教員だナ」と、西さんは頗る憂鬱になつて書齋に立てこもつてゐた。考へこんでゐると玄關のベルがヂヂヂツと鳴る。女中が差出す名刺を見ると栗原藤五郎とある。學生の頃行き來した男だが、我家の敷居をくゞるのはこれが始めてである。澤山の教へ子を育てた法學界の重鎮O博士の甥であることを鼻にかけて一寸意張つて見る男で、犬で云へばテリヤのやうな種であらう。猛犬がワツと吠えて出れば尾をまいて逃げ込んでしまう。

八時を過ぎた夜中に何の用であらう、會はぬ間に西さんはそれと悟つたが、座に招じて先づ久濶を叙した。澁茶をすゝつた彼は西さんの顔色を窺ひながら云ひ出した。

「實は僕の伴が君の學校を受けるのだが、どうかならんかナ、僕はかう見えても政界と實業界とに相當の勢力があるのだ。

昨日も或る中學へ頼みに行つたら、一番か二番でなければ絶対に採らんと校長が頑張り俺を劍もほろゝに追ひ拂つたよ。不都合な奴だから文部大臣に話して首にしてやらうと思つてゐる。君!! どうかして呉れよ」

西さんは之も残飯の手合だナと思つた。そして煙草を輪に吹きながら、天井を眺めてゐたが、

「兎に角自力で走つて、入學圏内に入るだけの點數を取らなければ、策の施しやうがな

いよ。マアよく勉強させるんだネ」

とあたらずさはらずの返辭をしてお茶を濁す。

「むづかしいかナ、それでは君、市立の中學の方はどうだらう、僕は市議は大分動かせるがナ」

と栗原はたよりなさそうな顔をする。

心でおかしさを噛みしめた西さんは、すぐさま残飯の話を持ち出した。聞いてゐた栗原は

「そんな木念仁の校長がゐてはいかんく。どこか他に巢を變へやう」  
とうかぬ顔をして出て行つた。

二三日したら栗原から手紙が來た。その中に僕は現内閣の三大臣を知已に持つ人間だが



不 定 芽

とあつて、閣僚三名の名が列挙してあつた。

獅子の皮を着た狐が白晝横行する。動物學の素養がない校長や教員共が、狐を獅子と見そこねて餌をとられるのだナと、西さんは考へた。

## 修學院の秋

大震災後の帝都復興の大計劃を立てるために、後藤新平伯の顧問として招聘されたのは、コロンビア大學にその人ありと知られたベアード博士であつた。短い滯留期間に家族に日本を學ばせるのも活きた教育になると考へた博士は、夫人令嬢の他に、當時ハイスクルの生徒であつた十五歳の令息を伴なつた。滯京一年あまりの間に、多趣味な博士は、能の研究もやれば歌舞伎へも出入する。愈々日本に別れを告ぐる頃には博士もその家族も一かどの日本通になつてゐた。ところでその令息は子供にも似合はず鋭い科學的頭腦の持ち主で、アメリカ魂とでも云ふのであらうか、物質の世界、科學の世界以外の事物には目も呉れぬと云ふ變り種であつた。

太平洋を走る客船の客となつて、博士や夫人令嬢と歡談を交へてゐた折のことであつた。ソシアルルームから蓄音機に送られて小さんの浮世風呂が鳴り響いて來た。その説明を求められて、パブリックホールバスの歌謡だと逃げたところが、「音樂を伴なふパブリック



不 定 芽

バースは見たことがない。どんな仕組みだか聞かせて貰ひたい」と令息に追求されて、ホトホト降参した。

話はずんで演劇の問題に移つたが、何を思ひ出したか令息はハッハハ……と笑ひ出した。そして云ふには

「日本の芝居に出て来る馬ほどおかしな動物はない。口をあけて上下の顎をバク／＼と噛み合はせるではないか。馬はマスティケートする動物だから、上下の顎を左右に動かして臼齒をすり合はせるものにきまつてゐる。それにあの脚は何だ。前は前、後は後で、人間と同じ歩るき方をするではないか。僕はあんな奇態な動物が出て来る劇は、おかしくて見て居られない」と。

「あれは人造の馬だから致し方がなからうじやないか」

「腹の皮がよぢれてとてもたまらないのに、あの馬が出て来て、チョンまげの男が何かものを云ふと、観客一同がソツと涙を流してゐる。非科學的な馬を見て涙をおとす日本

人の心理も僕には解し兼ねる」

なる程奴さん鹽原多助の青を観たナと直感した。そこでその劇の筋を細々と説明し、馬の姿はとにかく悲劇だからそれを観て泣けるのだと云ひ聞かせたところが、

「悲劇でも何でも、非合理的なものはおかしいのだ。あの馬を観て笑はずに居られるか」と云つて、アメリカンボーイは頑として應じなかつた。

「この兒の眼には科學の世界以外何物も映じないのです。何とかしてまことの心の眼を開かせたいものだ」とベヤード夫人は述懐して居たが、秋たけて高尾梅尾が紅葉に燃ゆる頃、博士一行は相伴ふて京洛の地をおとづれた。そして洛北の風光をめづつ修學院に足を踏み入れたが、白砂のきしむ清掃された道を踏んで、紅葉色濃き丘の上に立つた時、古雅な茶亭を眺めつゝ閑寂な境域に潺湲として流るゝせゝらぎの音に耳をすましたアメリカンボーイが、驚異の眼を見はつてジツと立した。瞑想暫しサラ／＼と落つる銀杏の葉の音に夢をさましたのか、彼は突如「マザー!!」と呼びかけた。そして

「世の中にこれほど美しい世界があつたのでしやうか、電氣の世界機械の世界以外に、



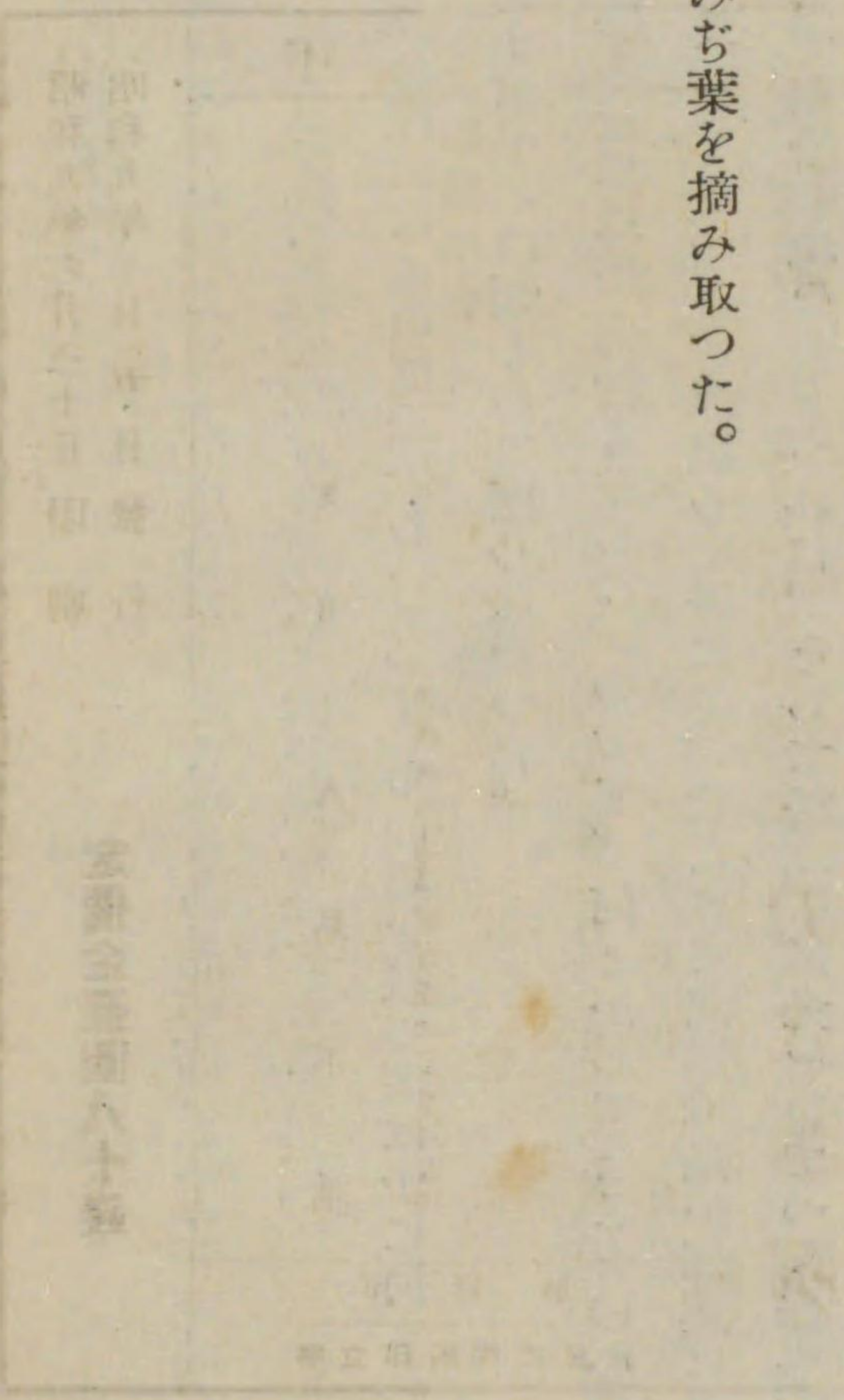
不 定 芽

神が人に賜はつた美はしい世界がある。清楚な閑寂な美そのものとも云ふべきこの庭園  
人間の手になつた至上至高のものを、僕は今感得したと思ひます」  
と云つて慈母の顔を仰ぎ見た。

母はニッと笑つて愛兒を抱きしめた。そして

「日本に來た最大なたまものは、汝の心眼が開けたことである。修學院の秋!! 美はし  
い!! 美はしい!!」

と云つて、記念のみみち葉を摘み取つた。



發行所 東京市神田區駿河臺 三丁目六番地 刀江書院 電話神田三三二一七八 一七八一 振替東京七三一八一	不 定 芽		昭和九年六月三十日印刷 昭和九年七月十日發行 定價金壹圓八十錢
	著 者 大 島 正 滿	發 行 者 東京市神田區駿河臺三丁目六番地 尾 高 豐 作	
		所 刷 印 社 會 式 株 刷 印 立 明	



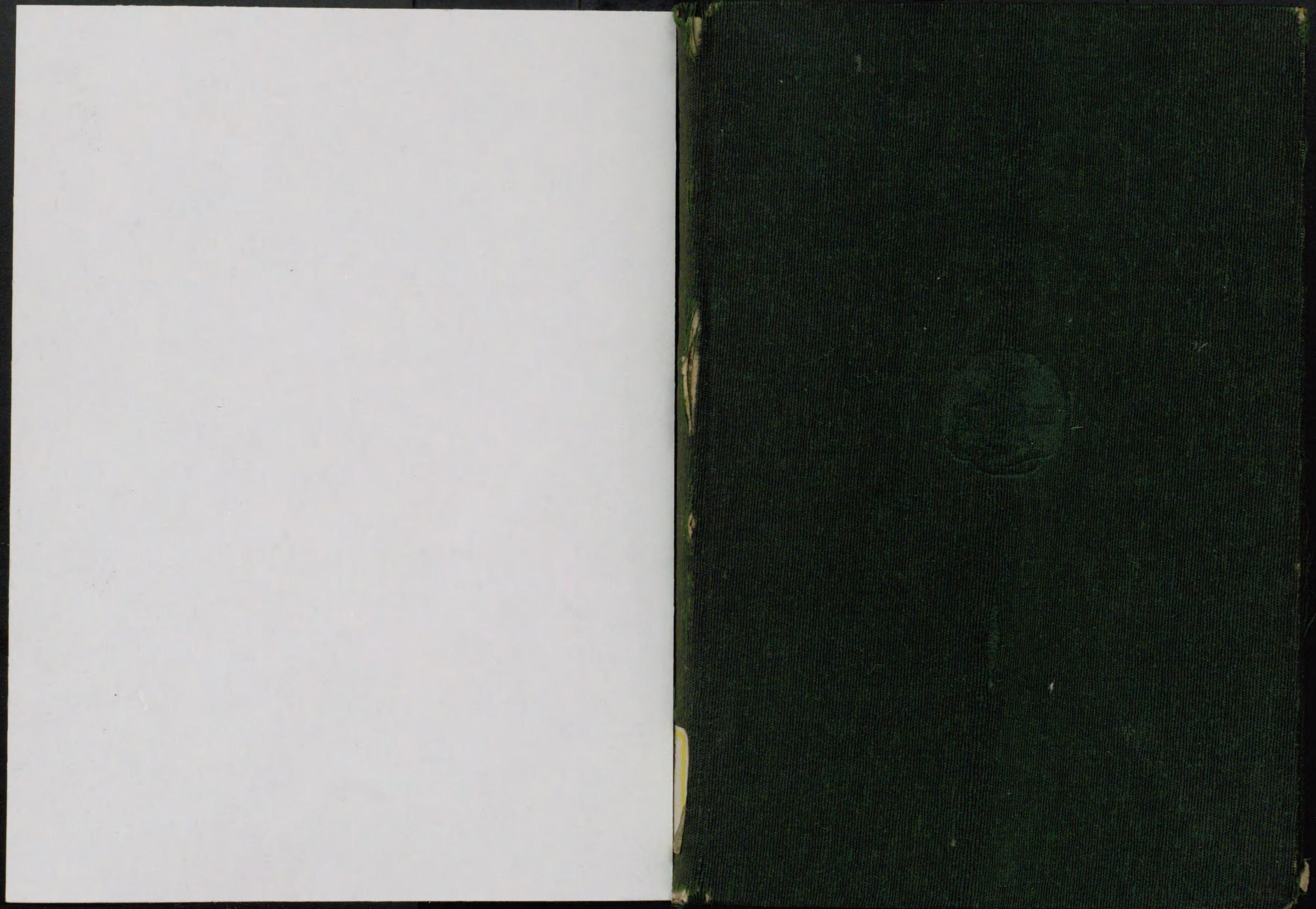
刀江書院刊行書目

池上喜三夫著	佛蘭西農村物語	定價二・八〇	送料・二二
井上吉次郎著	村と町と	定價〇・九〇	送料・一〇
伊藤金次郎著	新聞氣焰	定價・八〇	送料・一〇
西村眞琴著	大地の臟	定價一・八〇	送料・一四
伊藤金次郎著	わしが國さ	定價各一・〇〇	送料・一四
佐々木彦一郎著	山島社會誌	定價・三五	送料・〇四
京城學會編	西洋藝文雜考	定價三・〇〇	送料・二二
岸田劉生著	演劇美論	定價一・八〇	送料・一〇
孫晉泰著	朝鮮古歌謠集	定價三・五〇	送料・二二
三浦周行序 柴田寅三郎編	鳩翁遺稿 <small>(道話及自傳)</small>	定價二・二〇	送料・一四









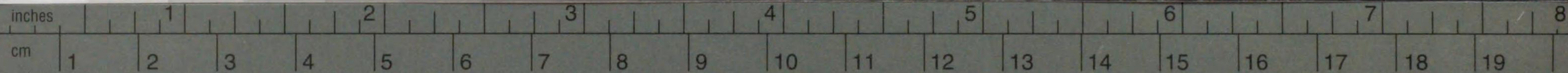


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

**A** 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

